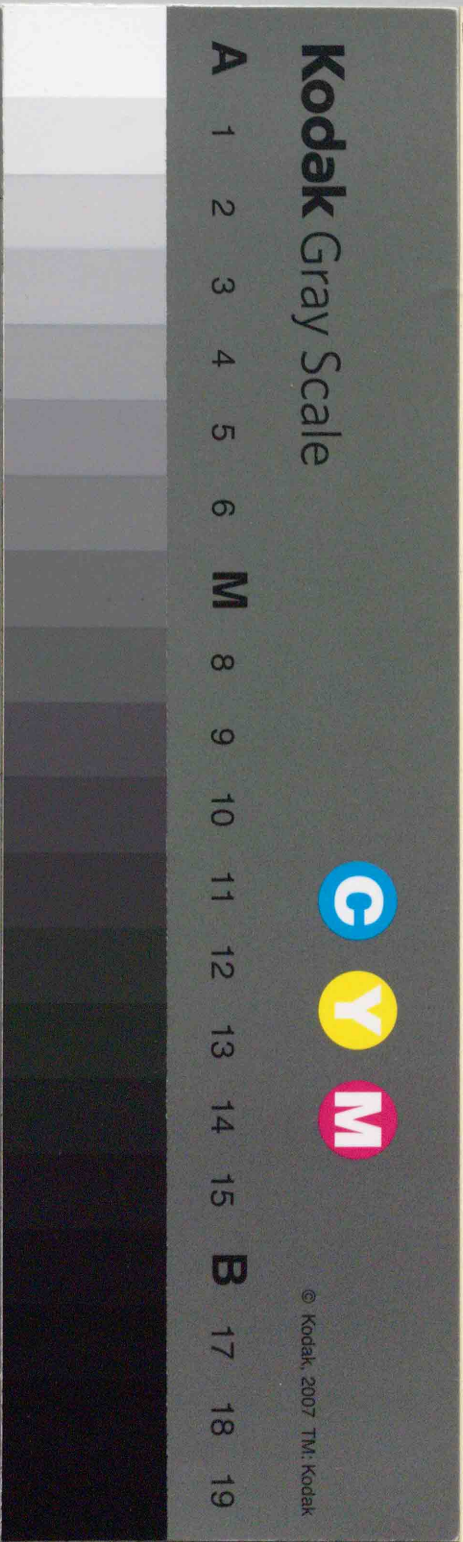
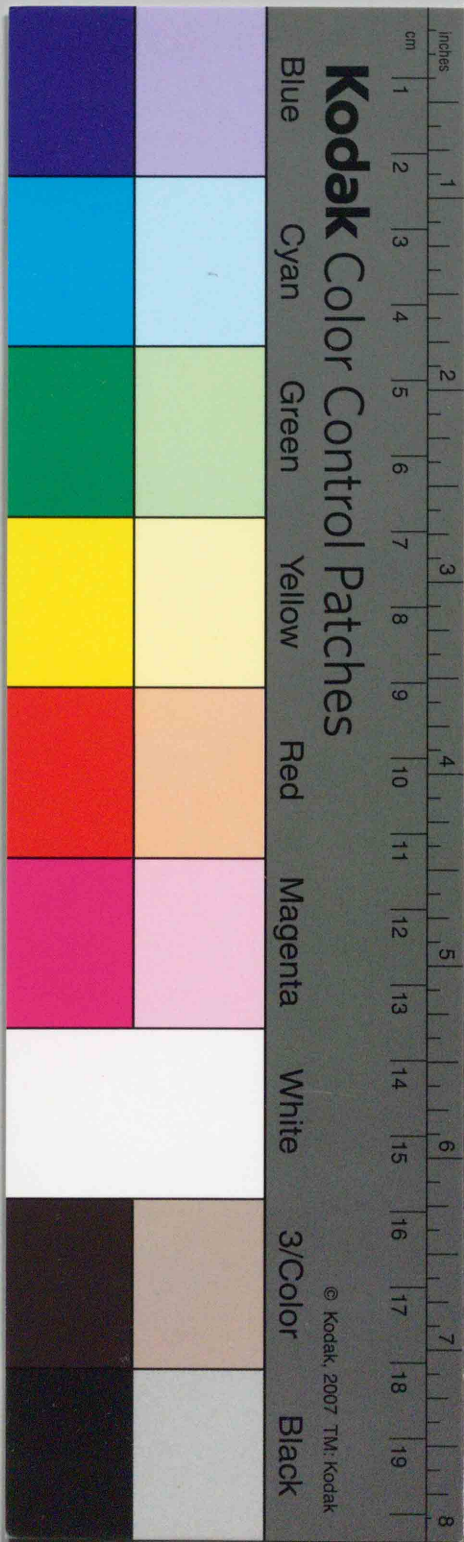
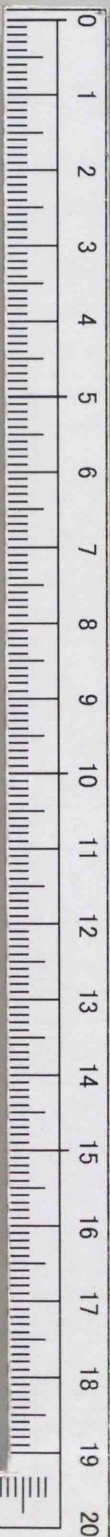


訂改  
帝國新讀本  
卷一

3759  
Ha7  
資料室



41579

教科書文庫

4
810
41-1927
20600 42774

52  
107



© Kodak, 2007 TM: Kodak



資料室

325.9  
Ha7

文部省檢定濟

中學國語科用

昭和二年十月二十七日

文學博士芳賀矢一編

改訂  
帝國新讀本

東京

合資  
會社

富山房發兌

第十三學級

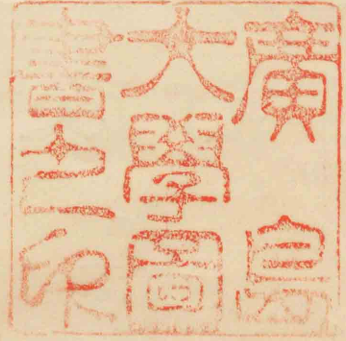
土井政行





吉野  
森月城筆

二  
櫻





訂改 帝國新讀本 卷一目次

一 入學の春……………	一
二 櫻……………	五
三 今上陛下の御幼時その一……………	石井國次……………八
四 今上陛下の御幼時その二……………	石井國次……………三
五 伊勢參宮……………	五十嵐 力……………一八
葉書だより(自修文)……………	内海 月杖……………三
一 名古屋から……………	三
二 京都から……………	二四
三 奈良から……………	三五
六 觀心寺……………	近松 秋江……………六



七 鯉のぼり……………白鳥省吾…三三

八 競漕……………久米正雄…三三

九 南國の春の旅……………木下利玄…三三

一〇 ハワイ短信……………岡本綺堂…三三

二 麥 笛……………吉江喬松…三三

    太陽の出る前(自修文)……………島崎藤村…三三

三 朝の頌歌……………川路柳虹…六一

三 日本海 of 海戦その一……………東郷吉太郎…六一

四 日本海 of 海戦その二……………東郷吉太郎…六一

    武士の情(自修文)……………佐藤鐵太郎…七四

五 猫の作戦計畫……………夏目漱石…八一

六 日本人の今昔……………幣原坦…八八

七 小 景……………千家元庵…九三

六 汝の母より……………姉崎正治…九五

元 漢土雜話……………(高等小學讀本)…一〇三

    蜘蛛の絲(自修文)……………芥川龍之介…一〇七

二〇 かんにん……………柳澤淇園…一四

二 漸進主義……………八波則吉…一八

三 田園の夏……………杉村廣太郎…二三

三 夕 立……………徳富健次郎…二六

四 月見草……………水野葉舟…二六

    畫 顔(自修文)……………吉村冬彦…二四

五 旅人となりて……………吉田絃二郎…二五

六 ふるさと(短歌)……………石川啄木…二五

七 座右の銘……………中根東里…二五

六 猫の名……………平雅翰…二五



元 明治天皇の御遺物を拜すその一……………笠井信一…二六

吾 明治天皇の御遺物を拜すその二……………笠井信一…二五

三 明治神宮に詣でて……………一七

三 親の愛の歌……………小林一 郎…一七

御先祖様の御墓(自修文)……………正宗白鳥…二八

三 鳥の美……………飯島 魁…二七

三 月雪花……………一九



# 改訂 帝國新讀本 卷一

## 一 入學の春

のどか

幽谷を出で  
て喬木に遷る

春は來れり。山の櫻は咲き、野の草は萌ゆ。遠山の雪は未だ消えざれども、小川のさゝやきは鳥の聲とともに長閑なり。新年を迎ふる喜にもまして喜ばしきは學年の始なり。まして今年のどかは小學校を卒へて、中學校にうつれるをや。幽谷を出でて、喬木に遷るといふ鶯にも似たるかな。學友の多くは舊知の人なれども、新しき友も半ばは交れり。新しき教科書を携へて校堂に上る嬉しさ。喜ばし、喜ばし。



つらつら

君臣の分

班に入る

趣

つらつら思へば、日本國の臣民と生まれ出でて、この大御代に遇へるは何よりの喜なり。世界の國々さまざまあれど、我が國史の如きうるはしき國史をもてるはなし。我が日本は建國の昔に君臣の分定まりて、萬世一系の太君代々相繼ぎて、仁慈の政もて民を恵み給ふ。君臣の間に父子の親みあり、一國は大なる一家を成せり。三千年の歴史を経て國勢は愈、盛に、今は世界一等國の班に入りぬ。日本臣民たる我等が心には、世界の人々の知り得ぬ誇あり、大なる喜あり。

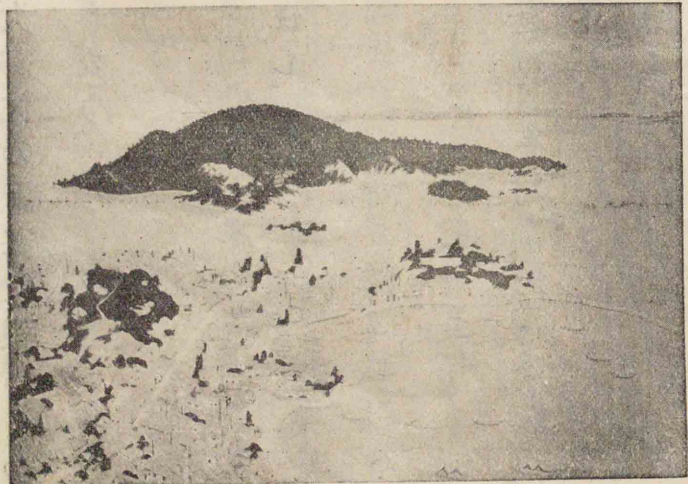
我が國は氣候温和にして、四季をりをりの移り變りそれぞれに趣變りて珍しく、春は花、秋は紅葉の樂しき眺いづもつきず。山は青く水は清くして、山には早蕨さわらびを摘み、菌きのこをあさ

興

神往き魂飛ぶ

る樂みあり、川には釣を垂れ、網をうつ興も多し。神々しき富士の山、繪の如き瀬戸内海、中にも日本の三景として世に知られたる陸前の松島、丹後の天橋立、安藝の嚴島、寫真にて見るだに神往き魂飛ぶ心地す。日本は世界の大公園なりと、外國の人人も稱讚したりとかや。

我が身を思ひ、我が家を思ひ、我が國を思へば、すべて大なる喜あり。青年の心には常にこ



(筆三省塚石) 海内の春



の喜の絶えぬなるべし。いでやこの喜の心を以て、日々の學業を勉め、父母の慈愛、師の高恩、大御代の恩澤に報いまつらん。時は今春なり。青年は人生の春なり。

時は今春、一年の春。

春の光は野山に満ちて、

目に見ゆるものすべてうるはし。

時は今春、少年の春。

春の喜胸にあふれて、

志すことつねに新し。

花見る毎に級こそ進め。

健たけき身體いよいよ健く、

早も重ねん、五つの春を。

健し

## 二 櫻

櫻の咲くのは春の末である。春の日本は水蒸氣が多い。どんよりと曇つて、寒くもなく、暑くもない。日和を花曇といつて、夜は照りもせず曇りもせぬ。朧月夜、雲霞と紛ふ花には最もふさはしい景色である。そよそよと面を吹くや春風。春の特色はどこまでものんびりとした心持にあつて、きりつめたやうな烈しさ、厳しさの少しもないところにある。櫻はちやうどこの時の氣候にはぐくまれて咲出でる花である。際立つた特色のないところが即ちその特色である。賀茂真淵(一)は

日和

(一) 照りもせず曇りもはてぬ

春の夜の、おぼる月夜にし

くものぞなき

(二) 新古今集大江千里

紛ふ

ふさはしい

特色

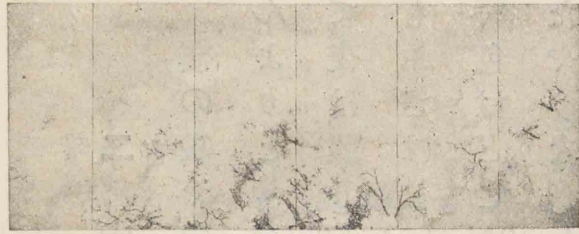
はぐくむ

(三) 江戸の國學者、明和六年(二)年四十九年、歿年七十三



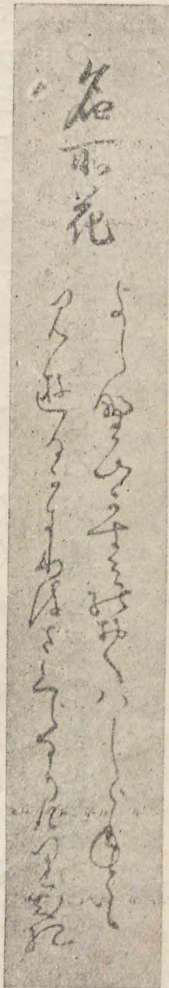
にほひ出づ

平安時代の歌  
人紀友則の作  
一櫻の花の散るをよめる  
と題して、古今集春の部に  
ある。  
ひさかたの  
しづ心  
大宮人



一のそ (筆輝春舎玉) 雲 櫻

うらうらとのどけき春の心より  
にほひ出でたる山ざくら花  
といつた。春の日は永い。  
ひさかたの光のどけき春の日に  
しづ心なく花の散るらん  
櫻は永陽の日に最もふさはしい花である。  
ここに大宮人のゆつたりとした優美な様子なども思ひ浮かべられる。

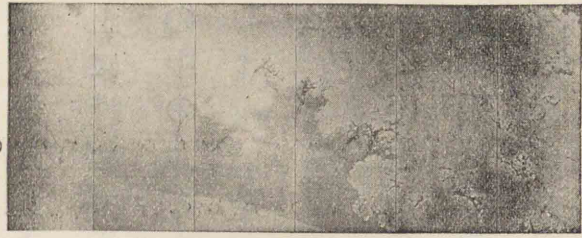


蹟筆紀知田八

奈良時代の歌  
人山部赤人の作。  
春の部にありしきのも  
も、しきの

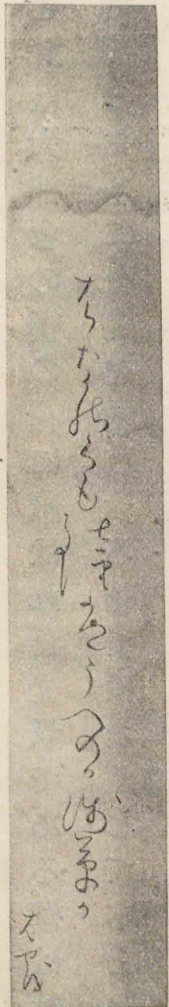
牛車  
黄昏  
さながら  
繪巻物  
二歌人八田知紀の歌。

三佛人松尾芭蕉の句。



二のそ (筆輝春舎玉) 雲 櫻

も、しきの大宮人はいとまあれや  
櫻かざしてけふもくらしつ  
牛車の歩みおそく花見て歸る黄昏の景、さながらの繪巻物である。  
よしの山霞の奥は知らねども  
見ゆるかぎりは櫻なりけり  
これは満山櫻の雲に包まれた吉野山の風景を詠んだのである。  
はなのくも鐘は上野か淺草か



蹟筆蕉芭尾松



これは大都會の櫻の花に蔽はれた光景である。櫻は牡丹や  
薔薇のやうに花瓣を愛賞する花ではなくして、木として愛  
賞する花である。否、多くの木を集めて、人はたゞ花の中に在  
つて愛賞する花である。下に見て愛賞する花ではなくして、  
上に眺めて愛賞する花である。春風四月、日本人はすべて花  
の中の人となるのである。

三 今上陛下の御幼時 その一 石井國次

今上陛下の御令徳多くおはす中にも、第一に驚き奉るの  
は、御記憶の抜群にあらせられることでありませぬ。學習院で  
今まで多くの生徒に接してまゐりましたが、陛下のやうに

令徳  
記憶  
群抜

御記憶の強い方は、見受けたことがありません。蟲の名でも、  
貝の名でも、聯絡も系統もないことまで、一度御覚えになつ  
た以上は、決して御忘れになるといふことがありません。

この御記憶の抜群を上に、御研究心が非常にお強く、何で  
もよい加減にして置くことが御嫌ひで、詳細に御質問にな  
り、また御自分で徹底的に御研究になるのであります。例へ  
ば、歴史で聖徳太子のことを申し上げると、御歸りになつて  
から参考書を御調べになり、聖徳太子の憲法とはどんなも  
のか、三寶とはどういふことかと御研究になる。理科で蝶の  
御話を申し上げると、蝶類圖説を御調べになつたり、盛に御  
採集になつたりして、日本産の蝶は勿論、外國産のものまで

詳細  
徹底的

三寶



觀察

理解

趣味

(一)東京府豊多摩郡代々幡村代  
明治天皇と昭  
憲皇太后  
(二)第二百二十二代  
調度品  
遺傳

も御觀察になる。或は電氣の御話を申し上げれば、種々な器械を御取寄せになつて御實驗あそばされ、無線電信や電話のことまで、すつかり御理解になるといふ風であります。旅行、登山の御趣味も豊富にいらせられ、單なる御運動としての外に、地圖や案内記をよく御調べになり、その産物や、動物、礦物から氣象のことまで熱心に御研究になる。萬事がかういふ風であらせられるから、御知識が確實で、且つ深みのあらせられることは、實に驚嘆し奉る外はありません。

(一) 明治神宮に參拜して、(二) 明治天皇の日常御使用になつた御調度品を拜觀したものは、誰でもその御質素なのに感泣しないものはないと思ひますが、陛下もまたその御遺傳のせ

感化

Gum.  
(護謨)



今 上 陛 下

いか、御感化のせい、か、御生來贅澤が御嫌ひでいらせられます。それです。から御學用品なども、全く一般學生と同様なのを御用ひあそばされ、鉛筆などは、當時一錢五厘の鷲印のを好んで御使ひになり、しかも、それが非常に短くなるまで、決して御捨てになりません。消<sup>(一)</sup>ゴムも當時四五錢くらゐなものを、豆粒ほどになるまで御使用になり、御帳面でも、半紙や畫用紙でも、決してむだにはあそばしませんでした。それで大正三年三月陛下が初等科を御卒業あらせられると、陛下のこの御高德を一般



裨益す

兒童に知らしめたら、さぞ國民教育に裨益するところが多からうと考へて、陛下の御使用になつた背囊、教科書、雜誌、筆入から、帳面、鉛筆、ゴム、その他陛下が御製作になつた手工品、圖畫、標本などを拜借して一室に陳列し、御教室や御控室などすべてを公開して、一週間市内及び近縣の小學兒童に拜觀せしめたことがあります。その時、毎日何千といふ兒童が、校長や教員につれられて参り、私どもは手分をしていろいろ説明をいたしましたのであります。たしか、<sup>(一)</sup>京橋か<sup>(二)</sup>日本橋あたりの學校と思ひますが、女の子で可なり綺麗な服装をして、幅の廣いリボン<sup>(三)</sup>などを着けて來た一組がありました。私がその女生徒たちに説明をしてから、皆さんは殿下さへかや

(一) 東京市京橋區。  
(二) 同日本橋區。

(三) Ribbon.

うに御質素であらせられることを拜見したら、もう立派な着物だの、幅の廣いリボンなどを家庭でおねだりができないでせうね。といつたら、感激して、大分泣いた生徒がありました。

#### 四 今上陛下の御幼時 その二

陛下はまた非常に規律正しいことが御好きでいらせられます。朝の御起床から御拜、御食事、御通學、御復習、御運動、御入湯、御寢まで、實に規律正しい一日の御日課を御守りになつて、御變更なさることはめつたにありません。随つていろいろなことをあそばすにも、すべて規律正しい計畫を立て



組織的  
公平無私

講評

て、組織的にあそばすといふ御性質であらせられます。それから陛下は公平無私な御方であらせられます。例へば、戦争ごつこをなされたあとで、私とその審判をして、勝敗をきめ、講評などをする時に、御自分の方に不利なことであつても、決して御隠しなさらずに、御申出になる。角力で陛下が相手を投げられて、軍配が御自分に揚つても、行司の氣が付かなかつた少しの踏切でも御自分にあると、これは私に踏切があつたから負であります。と御主張になる。審判官や行司が少しでも不公平な裁判をすると、非常に御嫌ひになる。仲間のものが、その方が都合が好いではありませんか。なにと申しますと、そんな不正直なことはいけません。と仰せに

私心を挟む  
批判  
理路井然  
大局から斷  
案を下す

なる。御判断に決して私心を挟まれない。それであるから、歴史上の事實を御批判なさる時など、實に理路井然、公明正大で、よく大局から斷案を御下しになる。實に陛下の御心は、さながら少しの曇もない明鏡であらせられます。それ故陛下の御心鏡の前に立つては、正邪善惡の姿がはつきりと寫し出されて、少しも隠すことができません。

陛下は非常に御仁心が深い。どちらかと申せば御口數の少い方で、御世辭などは仰せられないが、誠に思遣の深い御方であらせられる。随つて御幼少の時分から、普通の子供にありがちな、友だちをいぢめるとか、意地悪いことをなさるとかいふやうなことは、決してありませんでした。そして友



一視同仁

だちに對しても、御側のものに對しても、好き嫌ひといふことが全くなく、一視同仁で、公平に御愛しになります。侍従や侍従武官などに對しても、新舊の區別なしに、優しく御接しになるさうです。しかも舊いものをいつまでも御忘れにならずに、元の侍女だの御學友だのが御伺ひ申しますと、大變に御喜びになりますし、また時々、御召もあります。私どもにも無論その通りで、御誕辰やその他の御祝にはきつと御召があり、御機嫌伺に出れば御喜びになつて、特別に拜謁を許され、御暇の時はいつまでも御引止めになつて、御話し下されるのであります。先年御外遊の時には、私はロンドンやパリで御迎へ申し上げましたが、屢、御召を蒙つて御陪食を

拜謁

London

(倫敦)

Paris

(巴里)

陪食

荒む

賜はり、内外諸名士の前でも先生先生と仰せられるので、覺えず身の光榮に感泣した次第であります。これは實に教育者の天職に對する無上な光榮でありませう。人心がだんだん荒んで、師恩を忘れるどころか、全く念頭に置かないやうな學生の多い今日、陛下のなされ方は、實によい模範ではありませんか。

陛下の御盛徳を稱へ奉ると、まだ澤山ありますが、要するに、陛下は御天性實に間然するところのない立派な御方で、誠に神々しい御性質を、御生まれながらにしてもつていらつしやると申し奉る外はありません。

間然するところがない



(一)三重縣(伊勢國)宇治山田市  
 (二)舊山田に在る。  
 (三)舊宇治に在る。  
 神々しい畏さ  
 (四)水源は神路山内宮の神境を過ぎて二見の海に入る。一名御裳瀧川。



外 宮

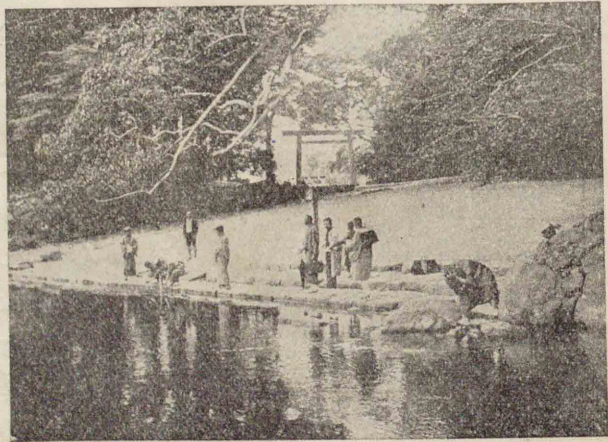
### 五 伊勢參宮

五十嵐 力

俄に參宮を思ひ立つて、きのふの夕八時に東京を立ち、けさ十時に山田<sup>(一)</sup>に着きました。まづ外宮を拜んで、次に内宮<sup>(二)</sup>を拜みました。兩宮の神々しさ、殊に内宮の畏さは言語につくせません<sup>(四)</sup>。五十鈴川の清き流に、水底の小鮎の數を讀みつゝ、恭しく口すゝいで、それから頭上の木の枝に猿の遊ぶ

### 堅魚木

のを見、名も知らぬ鳥の奥深く啼く音に耳を澄ましつゝ、綠色の苔に寂びた神杉の太い幹が、天を支へる柱のやうに立並んでゐる間をたどつて暫く進むと、やがて木立の奥、塀の彼方に千木、堅魚木の金色が拜まれます。更に進んで塀の内に入ると、正面の御門には、白布の垂幕が長く地に曳いて、靜かにそよ風に揺られ、その奥に疎に立つた神杉に護られて、御白石のびつしりと敷きつめられた間に、神々しい白木の



川 鈴 十 五



拍手  
祈願

(一)もとは武士であつたが、二十三歳感ずるところあり、諸僧となり、諸國を行脚した。和歌をよくし、建久元年(一一八三)年(一一七三)歳で歿した。

(二)「何事のおはしますか、は知らねども、は知らぬに涙こぼるる。」

額づく  
敬虔  
大廟  
單純  
偉大

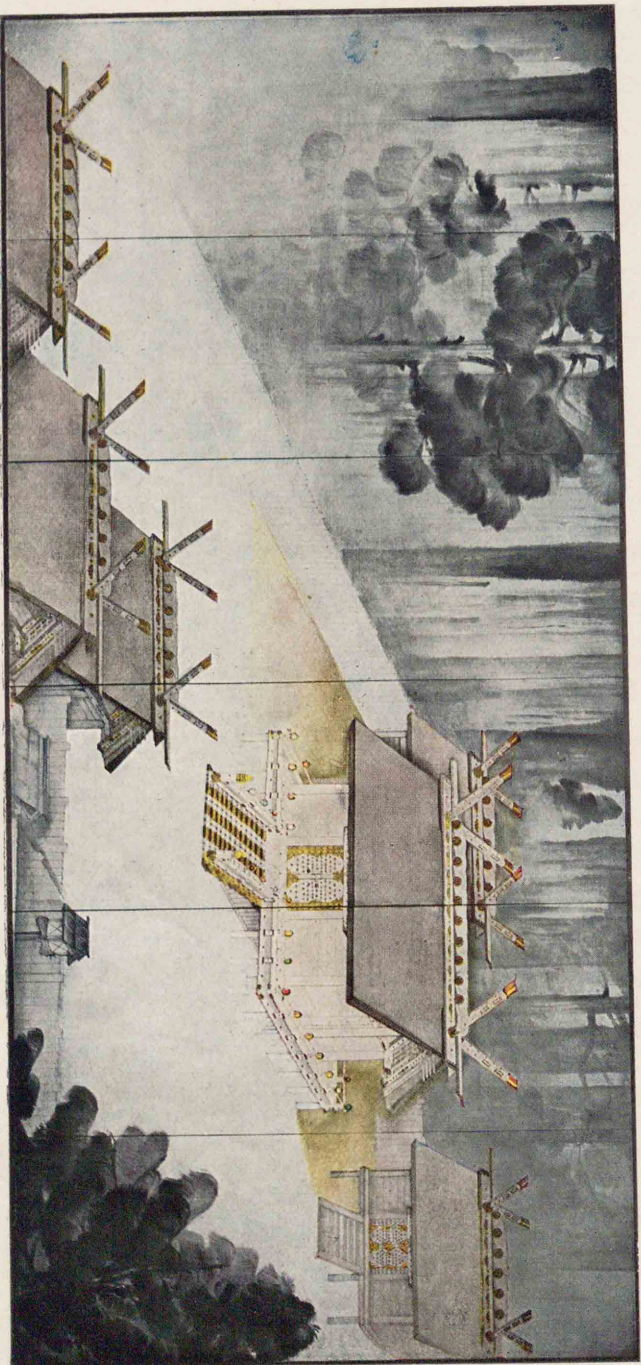
御宮が拜まれます。私はまづ御白幕の手前の石段の下に跪いて、小さい祈を捧げました。さうして傍に並んでゐた老爺や老婆が、拍手を打つては、溜息まじりに高聲の祈願を繰返すのに聽入りながら、現の間に西行法師が、忝(一)さに涙をこぼして額づいた、敬虔(二)な姿を思ひ浮かべました。

直き清き強き心をあらはして

すくすく立てりたふと神杉

大廟は「單純」といふものの偉大さを極度に表現したやうに拜まれます。さうしてこの御社の神杉は、樹木の神々しさを極度に表したもののやうに思はれます。

私どもは内宮の御後の神杉の根方から、一片の苔を採つ



宇 岬 龍 谷 葛

ざ う ら ひ



幽寂  
雅樂

神境を辭す

(一)五十鈴川にか  
かる。

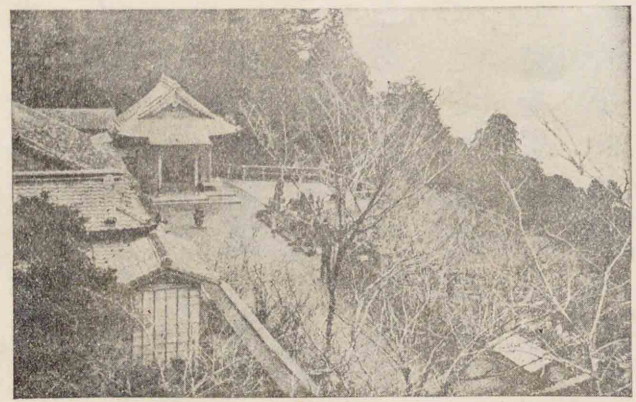
(二)明治天皇の皇  
后。

愛で聞き召  
す

(三)この地の名物。

(四)神路山の東北  
山上に朝熊神  
社がある。眺望  
望雄大。

をろがむ



て、押戴いて懷にし、御手洗川に口すゝいで、をりしも聞える

笙、箏、篳篥の幽寂な雅樂の音に送られ

て、この神境を辭しました。さうして

かへりみかへりみ宇治橋を渡つて、

昭憲皇太后の愛で聞き召したとい

ふ赤福餅に腹をこしらへ、それから

車を命じて、田圃路の五十九町を志

摩境の名山朝熊岳に走らせました。

御社のうしろの

御門をろがみて

ひとかけの苔をいたゞき歸る



(一)内宮の神境をめぐり、巖をみた山林。

(二)三重縣(伊勢國)度會郡。

(一) 神路山の御蔭を浴び、御裳濯川の流に肥された田圃路を車に揺られながら、私はこの神境が大神の大御心になつた謂れを考へました。大神宮儀式帳に、

度會の國は朝日の來むかふ國、夕日の來むかふ國、浪の音聞かぬ國、風の音聞かぬ國と、弓矢柄の音聞かぬ國と、大御意鎮ります國と悦び給ひて、大宮定めまつりき。

とあるのを見れば、第一には、山水の景色のたぐひなさを愛でさせられたのであらう。第二には、地勢、氣候、風土のうるはしさを愛でさせられたのであらう。第三には、この土地に永久な平和の可能性のあることを愛でさせられたのであらう。最後には、一切の消極的煩累に煩はされずして、皇御孫に

可能性  
消極的  
煩累

積極的  
發展  
見そなはず

饒舌

(一)名は弘藏。神奈川縣の人。文學士(國文)。明治大學教授。

(二)名古屋城の天守閣上に飾つてある。

率られる大和民族の積極的、光明的發展を見そなはずに都合のよい、氣の落着く境と思はせられたのであらうなどと考へながら、をりをり車夫の饒舌に氣を轉じてゐる中に、いつか朝熊岳の麓に着きました。

——我が書翰——

葉書だより (自修文)

内海月杖

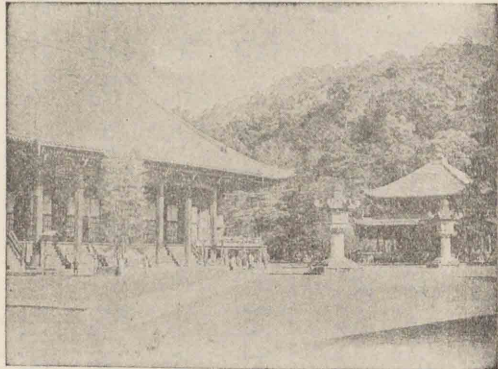
一 名古屋から

けさ五時十分の東京驛發で愈、修學旅行の途に上りました。右に富士山、左に駿河灣を、春霞の淡い中に眺めながら通りました。時には、實に愉快でございました。いえ、そればかりではありません、見るもの聞くもの、旅では皆珍しく新しく、愉快でございます。今名古屋に着きました。夜に入りましたので、金のしやちほこはまだ見ません。

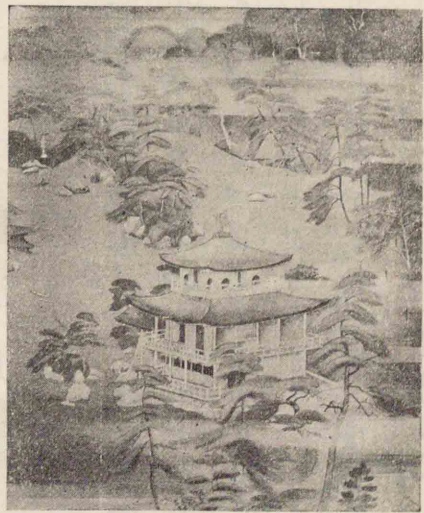


二 京都から

(一) 金閣のもの寂びた庭に限りな  
 い閑寂の趣を味はひ、さて知恩院  
 から眞葛が原を過ぎまして、今圓  
 山公園の垂絲櫻の下に休んでゐ  
 ます。



知恩院



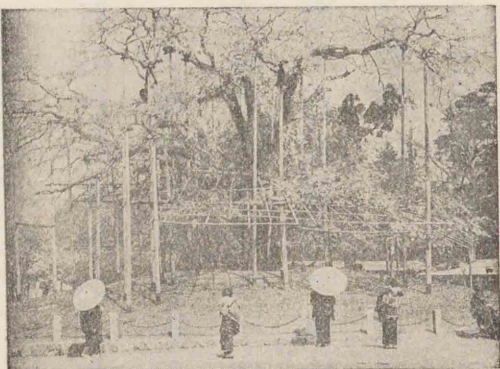
(筆熙玲口山) 閣金

山(六)のこ  
 んもりとした森の彼方から長樂寺(七)あた  
 りのらしい鐘の音がわたつて来て、都人  
 の極彩色の長い袂に、夕暮の春風が暖か  
 く訪れます。花がちらちら散ります。  
 あゝ、京都はほんたうに繪のやうでご  
 ざいます。

(一) 京都北山。足利義滿の建てたもの、のち寺とした。  
 もの寂びた庭なく静かな庭。  
 閑寂のものしづか。  
 (二) 京都東山華頂山の本山。淨土宗の本山。  
 (三) 今は圓山公園の一部となつてゐる。  
 (四) 知恩院の南に接してゐる。  
 (五) 所謂祇園の櫻。  
 (六) 京都東山の中昔この地に華頂院が在つた。のて一名となつた。  
 (七) 圓山公園の中に在る。  
 極彩色  
 極めてこい精  
 密な彩色

(一) 興福寺の南の崖の下。池邊に柳が多い。  
 (二) 東大寺の中堂の本尊。

(三) 奈良の東方春日山。北の芝生。一面に高草。嫩草。山。三つを合はせて三笠山といつたやうである。



圓山公園垂絲櫻

番私の心を引きましたのは、俗に三笠山と呼んでゐる嫩草山(三)でございます。ふつくりとした山の中腹に、二三本の松が立つてゐまして、その下の一面の若草の上に、例の鹿が群れて遊んでゐ



猿澤池

三 奈良から

奈良に來ました。京都を繪だとし、と、奈良は詩でございます。その詩の趣を殊にしみじみとしのばせて、今音も立てぬ雨がしとしとと降りくらしてゐます。

猿澤(一)の池も  
 見ました。大  
 佛も見まし  
 た。しかし、一



ます。それを靜かな雨がぼかしてゐます。  
あゝ、奈良はほんたうに詩そのまゝでございます。

### 六 觀心寺

近松 秋江

大正九年の四月十八日であつたと思ふ、私はその時分京都に住んでゐた。京都の春にもちよつと飽いてゐたから、どこか河内の方の春を尋ねて見たいと思つて、その日汽車で奈良の方を廻つて、關西線の柏原(一)から南河内の長野の方へ行く輕便鐵道に乗換へて、その晩は長野に着いて泊つた。楠公の菩提寺である河内の觀心寺(二)へ行つて見たいと思つたのである。それから天野の金剛寺(三)へも行つて見たいと考へ

(一)大阪府(河内國)南河内郡柏原町。大和川の上流。  
(二)同郡長野村。柏原の南約五里。  
(三)同郡川上村大字寺元。に在る。  
(四)同郡天野村大字下里。眞言宗。寺中に後宮址が在る。

### 溪谷

た。奈良から大阪の方へ向かふ大和川の小さい溪谷を通過する頃、そこらの松の木山のところどころに、山を切開いて桃を作つてゐる所がある。その桃はもう大分盛は過ぎてゐるが、まだ淡紅色の花を残してゐるのが、赤松の幹の間に美しく見えてゐる。それがいかにも土佐派の繪によく似てゐる。土佐繪などといふものは、寫實ではないやうに思はれてゐるが、やつぱり藝術の起源は現實を摸倣してゐるといふ原則に反してゐない。大和地方は土佐繪のモデルになるによい所だなどと思ひながら行つた。

翌朝目を覺すと、懶いもろ点滴の音がして、春雨が降つてゐた。私はそれで非常な不幸を感じた。春雨は悪いものではない

### 寫實

### 藝術現實

Model.

### 点滴



かこつ

が、かうしてせつかく一日二日の外出を目的とする小旅行に出てるのに、雨に降られるといふのは、何といふ悪い日に出會つたことであらうと、心の中でかこつた。ま、よ、どうしても雨がやまなければ、これからすぐ京都に引返すまでのことだと諦めながら、朝飯を食べてゐると、明るい春雨は間もなく小降りになつて、軒の點滴の音も靜かになり、空には白い雨雲が旭の輝きと共に刻々に霧散して、その切目から碧空が顯れて來た。私の氣分は俄に軽く楽しく、幸福の感に満ちて來た。曉方の春雨の一降り、そこらの草木の色が艶を帯びて輝き、向ふの山の際に立つてゐる一本の山櫻が、眞白に旭に匂うてゐる。

霧散す

(一)河内國と大和國との境に聳えてゐる

×

觀心寺への道は、<sup>(一)</sup>金剛山に登る道である。行くに随つて、両方から小さい山と山との間の田圃が次第に狭まり、向ふの松の木山の尾根には、淡紅な若葉を吹いた山櫻が、靜かに咲いてゐる。籬段のやうに次第上りにどこまでも高い方へ重つて行つてゐる麥畑のところには、菜種の花が黄色く咲いてゐる。青い麥の葉と、黄色い菜の花と、山際の爽やかな朝の空氣と、いかにも春らしい匂が一面に満ちてゐる。春日は遅々として輝き、往來の人三五人。向ふから博勞<sup>ぼらう</sup>が牛を牽いて來た。黄色い蝶々がその牛の背に睦れつゝ、一緒に翔つてゐる。



點綴す

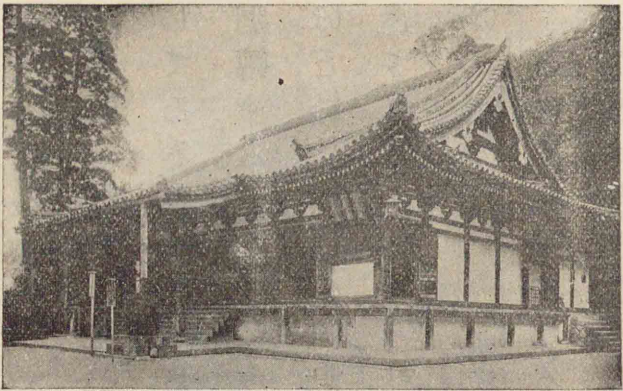
籬落

眉を壓す

隠見す

やがて左方の低い山際に沿うた道は、いつとはなしに次第に高みに上つて來た。そして麥畑と雜木林とを點綴した間の道を、右に折れ左に折れてなほ少時行き、一つの切通を向ふに通りぬけると、前面に俄に深い溪谷が開展してゐるのが、脚下に見おろされた。なかなか大きな溪である、眞青な麥畑の野が遠く傾斜して續き、人家の籬落がその間に點綴してゐる。薄い霧が一面に立ちこめて、そのまた向ふの方には、紀伊と河内との境上を東西に走つてゐる紀伊見峠の、優雅な形をした山脉が、眉を壓するやうに聳えてゐる。左方の繩手道に續く溪の奥を見ると、深い山と山との重り合つた奥の方に、金剛山の峻峰が、まさしくその一角を隠見してゐる。

願望低徊



觀心寺

るのも心をそゝる。

私は山の多い關東と違ひ、山を見る點では殆どばかりにしてゐたこの近畿にあつて、こんな山岳のふるまひにあづかつたのは、全く思ひもかけぬ御馳走になつたやうな氣がした。私は繩手道の中央に突つ立ち、した、か春光を浴びながら、願望低徊去る能はざるものがあつた。脚の下からすぐ可なりな急傾斜をなして、向ふの溪底に陥没して行つてゐる麥畑の野面には、ここに



はまた菜の花が、あちらにも、こちらにも、黄金の席を展べたやうに咲盛り、そのまた下の方のひとむら濃く繁茂した森の蔭には、水車小屋が立つてゐて、大きな大きな水車の廻轉してゐるのが見える、それに春の日が麗かに照輝いて、車の廻轉するにつれて、きらきらと水が白く反射してゐるなるほど楠氏三代の誠忠は、こんな清純な山中に於て始めて涵養されたのだなど、私はひとりで大いにうなづくところがあつた。

それ以來春になる毎に、もう一遍行つて見たいと思ふ所は、その河内の觀心寺の溪である。

(一)正成、正行、正儀の三代。  
清純  
涵養す

七 鯉のぼり

白鳥 省吾

鯉のぼりが動いてゐる。

汽車の窓から見える村に、町に、都會の屋根の上に。



(筆兎一谷古) 葉若柿

桐の花、桑の青葉、たんぼぼ、れんげさう。柿の若葉の下には農夫の晝寝。時として古い旁ぶきの屋根の向ふに青い五月の海。



鯉のぼりは動いてゐる。  
 この土地に生まれ、  
 この土地に育つことの喜。  
 日本の男性の喜。  
 親と子との生活の喜。  
 快活な無言の歌。

八 競 漕

久米正雄

晴れがまし  
 競漕の日は来た。空は朝から美しく晴れあがつた。學校の學務室から小使が朝早くやつて来て、合宿所の前に樺色の大きな旗を立てた。それがいかにも晴れがましく見えた。

午後になると、晴れたまゝに風が吹いて来て、應援船の旗をはたはたと鳴らした。コースには可なり荒い波が立つた。愈、競漕が始らうといふ頃になつたら、珍しい夕風夕風が来た。選手は皆樺色のユニフォーム(一)を着た。土手では觀衆が一種の尊敬と好奇との念をもつて、この樺色の衣服を着た選手たちに道をあけた。  
 身方の短艇がまづ拍手に送られて、臺船を離れた。二十本ほど漕いで、審判艇の差出す綱に繫留した。續いて紫の敵艇も繫がれた。  
 艇庫と土手と應援船とから、「樺あ。」「紫い。」などといふ聲が錯綜して起つた。審判艇は二つの艇を曳いて、發足點へ向か



浮標

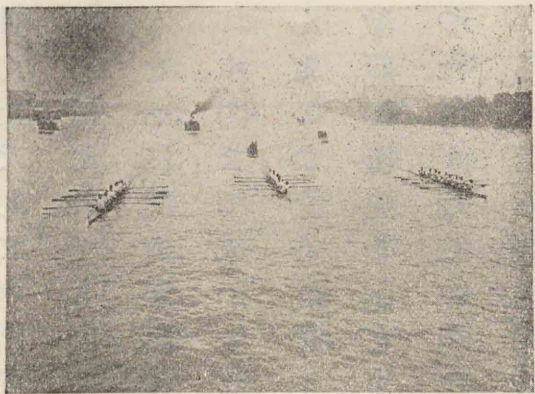
瞬間

つた。艇は發足點の赤い浮標に着いた。水路を見わたすと、風は全く凩いでゐるのではなかつた。それは絶えず東北から吹いて来て、艇首を左へ曲げた。私は氣が氣でなかつた。その中に「用意」の命が下つた。艇首はまた一瞬間強風に曲げられた。え、ま、よ。もうなるやうになれ。」と目を瞑つた。號砲が鳴りわたつた。用意と號砲との間がほんの一瞬間であつたのに、ひどく長いやうに思はれた。二つの艇の櫂は同時に水に入つた。

Seat

身方の艇はどうも滑り出しがよくなかつた。こいつはいけない。皆慌てたな。」と思つた。敵艇を見ると、確かに一二シートは此方より出てゐるらしい。ゆつくり。」と整調が叫んだ。私

は更に大きな聲で、もう一度その言葉を全艇に傳へた。皆の



スーレストーボ

調子がやつと合ひだした。この時向ふの紫の舵手が、敵艇を抜くこと約半艇身。」と叫んだ。私は忽ちその後を承けて、「嘘だぞ。」と怒鳴つた。今まで黙つてゐた私は、一度その言葉をいつてしまふと、急に口の緊りが解けたやうな氣がして、恐しく雄辯になつた。その中に紫の三番が一つ大きなスプラッシュをして、水煙が鮮かにぱつと騰つた。機を得たといはぬばかりに、私は、やつたぞ、あんな大きなスプラッシュ

Splash.  
機を得る



報酬す

ユを。」と叫んだ。それを見たもの、見ぬものも皆その言葉に元氣づいた。敵の艇は沈黙してしまつて、間もなく二つの艇は並んだ。そして水門前で身方は約半艇身先んじてゐた。紫の舵手はそれでも向ふはもうへたばつたぞ。」などといつた。私も「なあに、此方が出てゐるぞ。」と應酬した。

機先を制す

水門まで來かゝると、私は「さあ水門だ。」と敵に先んじて叫んだ。いかなる舵手でもいふにきまつてゐる場所の指示を、敵艇の機先を制していふのも、一つの戰術であつた。早くいつた方が、遅くいつた艇より先にその場所に届いたわけだからである。後馳おくれはせに敵は水門で特別な力漕を十本した。それでまた艇は並んでしまつた。後から追附かれると、何だかず

おくれはせ

(一) 渡漕の場所は東京の隅田川で、渡場とは竹屋渡のこと。

半眼 Pitch.

Last heavy.

激勵す

つと追抜かれたやうな氣がするものである。身方の艇は何だかいつもより船脚が遅いやうであつた。でも暫くすると、身方の艇がまたじりじり抜きだした。私は「この調子で。」と叫んだ。敵は沈黙してゐた。そしてもう渡場(一)での力漕十本は効力がなかつた。整調は半眼でその力漕を見やりながら、やつと安心してピッチ(二)を上げだした。

洗場では半艇身以上先んじてゐた。しかし、ここでの半艇身許の差では、敵のラストヘビー(三)が利けば何の役にも立たない。私はあと一分だ。もう死んでもいいぞ。」と激勵した。この「あと一分。」といふ練習中に用ひ馴れた言葉が、何よりも選手を元氣づけた。一分間なら、いくらへたばつても漕げるはず



協力

なのである。皆は疲れて来た。すると不思議に艇がよく出だした。身方の艇は、疲れてくると各個人の癖がとれて、全體としての調子が揃ふのである。協力はこの時始めて平均した。そして整調の權につれて、各は器械的に身體を前後に動かした。敵のラストも實によく出た。しかし、これを見て氣遣つてゐる間に、身方の方のヘビーも非常によく利いた。多年の熟練で整調のピッチがぐんぐん上つた。もう十本。決勝點に入るまでは、随分長く感じられた。私はひよつとして、もうウインニングへ入つても、審判の號砲が發火しないのぢやないかと思つた。その瞬間に號砲は響いた。皆は漕止めて、艇内に

〔Winning〕

喝采

身を伏せた。私は始めてこの時嵐のやうな喝采が水上に鳴響いてゐるのを聞いた。これは決勝點に近づく時から盛に鳴つてゐたのであるが、私の耳には入らなかつたのである。「どつちが勝つたんだ。」と、二番が苦しい息の中から情ない聲を出した。安心し給へ。僕等だ。」と私は答へた。しかし、私自身も勝利を確信してゐるのではなかつた。そして審判所に掲げられた樺色の旗を見るまでは、安心がならなかつた。喝采はまだ續いてゐた。今までに類のないほどの接戦であつたのが、敵、身方のいづれにも屬してゐない觀衆をさへ、熱叫せしめたのである。

接戦

熱叫す

— 學生時代 —



### 九 南國の春の旅

木下利玄

神武天皇の御腰掛岩あり天皇も

つかれたまひけん我等の如くに

大正六年の五月、別府から日向を旅行して、宮崎を経て鹿兒島の方へ出たことがあつた。鐵道は豊後佐伯止りだつたから、まづ汽船で延岡まで行つた。この間は昔の速吸の瀬戸今の豊後水道から、日向灘にも少しかゝつてゐて、荒易い所ではあるが、さすがに春の海のことだから、蒼々と重く風いでゐた。自分は甲板上の春日にのぼせ、冷たい海水を見おろしつゝ、半日の航海をして、日向の土々呂に上陸した。

(一)大分縣(豊後國)別府市。  
 (二)宮崎縣宮崎市。  
 (三)鹿兒島縣(薩摩國)鹿兒島市。  
 (四)大分縣(豊後國)南海部郡佐伯町。  
 (五)宮崎縣東臼杵郡延岡町。  
 (六)瀬戸内海の外洋に通ずる四海峡の一。  
 (七)東臼杵郡伊形村大字土々呂。

### 柑橘類

ここから延岡へ向かふ途中は、をりから盛のぞぼんなどの柑橘類の甘い花の香が満ちてゐて、空氣がとろとろになつてゐるやうな氣がした。

### 街衢

延岡の旅館では、通りに臨んだ三階の一室に通されたが、交通不便な南九州の、それに全く知人もゐない町に来て一夜を泊り、街衢を往き來する人の下駄音のからこゝ響いてくるのを聞くのは、まだ五月ながらも、はや夏らしい氣持さへして、旅愁をそゝられるのであつた。翌日は日向の海岸沿の街道を三十里許、がた馬車を乗りつき、乗りつき、南へ南へと下つた。乗合は延岡から高鍋の製絲工場に行く十四五の少女が三四人だつた。日除幕をおろした馬車のとゞろきに

### 旅愁をそゝる

(一)宮崎縣兒湯郡高鍋町。



倦む

(一)兒湯郡美々津町

身を任せて、自分は疲れ、且つ殆ど倦みきつてしまつた。馬車(一)が美々津町に着いた時に、美々津河岸の茶屋で晝食をしたため、近いあたりに歩を移して見たら、そこに圖らずも神武

天皇御腰掛岩といふのがあつた。



(筆邦雅本橋)皇天武神

尖には金鷄の止つてゐる、威嚴に満ちて、自分などとは飛離れた御姿が頭に浮かんでくるのだが、今ここにその御腰掛岩があるので、天皇とてもきつと長途の行軍に御疲れにな

金鷄

長途の行軍

汗ばむ

想像す

はた

未知

つて、御顔など汗ばみ、御足にも豆くらゐできて、この岩に御腰掛けになつてゐるところを想像すると、自分たちにもつと親しめる、寧ろ懐かしい御方のやうな氣がして來た。そして、果してその岩が御腰掛岩かどうかなどといふことは、問題ではなかつた。

神武天皇が日向からこの街道を進ませられるには、海路を取られたか、はた陸路だつたかはわからないと聞いてゐるが、何にしても、今日自分等が旅行するのさへ可なり骨が折れる所を、遙々と未知な大和の方へ向かつて、軍を率ゐて行かれたのだから、その御困難は今日想像の外だつたらう。そしてその東征計畫の、いかに大決意であり、またいかに大



〇實感  
〇懷古の情

事業であつたかを思つて、歴史を讀む時よりもずつと實感で、懷古の情に堪へられないのであつた。そして、一度、美々津の川口と、その注いでゐる日向灘とを見た。——李青集——

一〇 ハワイ短信

岡本綺堂

〔Hawaii〕(布哇)北太平洋中にある十餘の群島。最大島ハワイは二四〇〇方哩。  
〔Kauai〕ハワイの首府ホノルルの北、方約五哩にある島。  
〔Kiabe〕(キアベ) 豈科の喬木。實を牛馬の飼料とする。  
〔Hibiscus〕(ヒビスカス) 木芙蓉科の喬木。ハワイの國花。

午後一時頃宿を出て、ヌアアヌの古戰場へ向かふと、その途中で時々驟雨がさつと降つてくる。これがこの島の習で、多くは降らないといふ。白地の單衣を着た日本の娘たちが、洋傘を傾けて、キアベの樹の下を縫つて行く。キアベは柳のやうな樹で、その長い葉が娘の傘の上に濡れて靡いてゐる。この島では、日本服は婦人にだけ許されてゐるので、ハイビ

スカスの紅く白く咲いた生垣のほとりにや、キアベの青く垂れてゐる樹の蔭に、長い袂がちらちらと揺れて見えるのも、



スカスビイハ

何となく懐かしく思はれた。驟雨は忽ち晴れて、明るい日の光が草花の露を照らしたかと思ふと、またどこからか霧のやうな雨が烟つてくる。晴また雨、雨また晴、人を弄ぶやうな南國の空を仰ぎながら、自動車は町はづれからだんだんに坂路を登つて行くと、幾曲りした坂の頂上に、雄大な繪巻物が突如として展げられた。

〇人を弄ぶ  
〇突如

た晴、人を弄ぶやうな南國の空を仰ぎながら、自動車は町はづれからだんだんに坂路を登つて行くと、幾曲りした坂の頂上に、雄大な繪巻物が突如として展げられた。



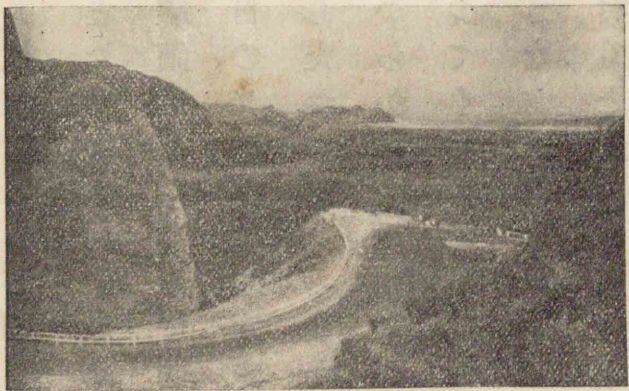
〔Kamehameha〕  
西曆一七九五  
年四月新たな  
移住民を破つ  
てハワイ統一  
の基を定めた。

歴史的感興

遺憾

そり立つ

私たちが今立つてゐる坂路の頂上は古戦場である。ハワ  
イの歴史について殆ど何の知識も  
もたない私は、西曆千七百九十五年、  
カメハメハ第一世（カメハメハの像）がそこで大いに  
敵軍を破つたといふ事蹟を聞くに  
過ぎない。随つて十分に歴史的感興  
を喚起すことのできないのを甚だ  
遺憾とするが、見るところ百尺の斷  
崖が斜にそり立つて、その裾は大  
きな海の方へ開けてゐる。この時代  
のこの島國の戦鬪は、石の鏃を飛ばしたり、焼石を投げたり



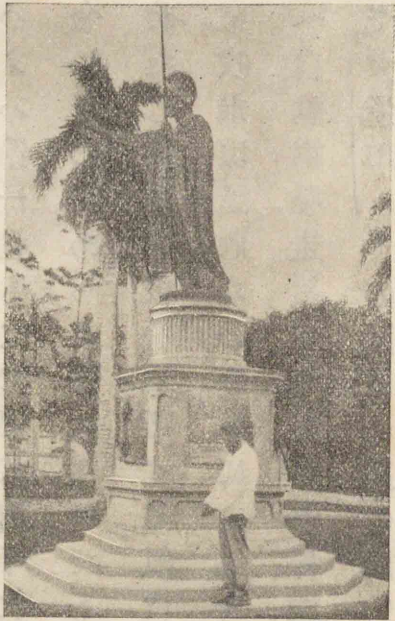
場戦古ヌアヌ

一代の英主

險要を扼す

おめおめ

颶風



世一第ハメハメカ

したと傳へられてゐる。カメハメハ第一世も勿論一代の英  
主ではあつたらうが、この險要を扼して待受けられては、大  
抵の敵もおめおめ撃退  
されるより外はあるま  
い。ここの名物は、古戦場  
といふ以外に、非常に東  
北の風の強いことであ  
る。海から吹上げてくる  
風の勢の凄じさは、さながら颶風のやうで、油断したら帽子  
はおろか、自分のからだも吹飛ばされてしまひさうになる。  
けふは近來珍しい、靜穩な日であるとのことであつたが、始



叱咤號令す

めて登つて來た旅人に取つては、決して靜穩ではなかつた。わたしは幾たびかよるめきながら、僅かに自動車の蔭に隠れて、この凄じい風の手につかみ去られるのを免れた。カメハメハ第一世もこの風の眞中に突つ立つて、身方を叱咤號令したのであらう。それだけでも彼に英雄の資格はがあると、わたしは更に彼を尊敬する氣になつた。

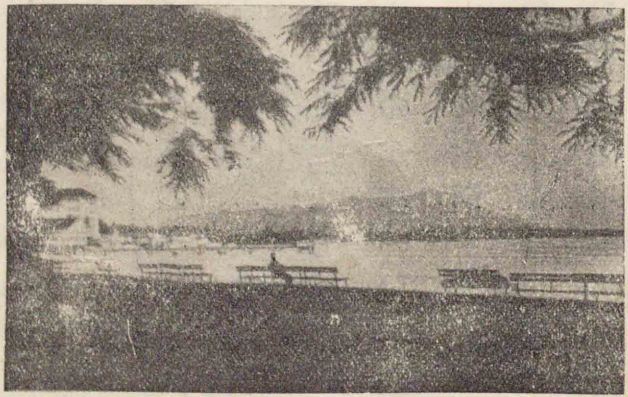
Waikiki.  
ホノルルの東  
南方。

坦々

吹飛ばされないうちにここを立退いて、ワイキキの方角へ自動車走らせて行くと、棕櫚や椰子の並木が路を挾んで、大道坦々、その間には庭の廣い、花の多い西洋館が、ここに見える。驟雨はもう通り過ぎたと見えて、空の瑠璃色は愈、明るくなつた。その空を彩るやうに、大小の虹が遠く近く

懸つてゐる。虹はこの島の名物の一つであつて、月夜にも虹の出るのは珍しくないとのことである。

島の人が世界一を誇る水族館は、案外に小規模なものではあつたが、色彩の美しい魚類ばかり集めたと、いふのが、恐らく彼等の誇であらう。ここにも日本の金魚や、緋鯉が見出された。水族館を出ると、例のキアベの枝に涼しい風がそよそよと流れてゐる。



キ ア ベ



○さのみ

夏冬の區別のない海水浴場を見物して、再び椰子や棕櫚の間を潜つて出ると、自動車はいつか支那町へはいつて、更に日本町を一巡する。そこには湯屋も、理髪店も、鮪屋も、餛飩屋も見えた。ハワイは氣候の良い所で、夏もさのみ暑くない、冬も勿論寒くない。生活も他に比較すれば頗る安樂であるから、生活に疲れた諸國の人々が、一時の隠所として尋ねて来て、ついそのまゝに腰を据ゑてしまふのが多い。日本人も移民を合はせて十三萬に近い。氣候も溫和、生活も安樂、まことに太平洋上の樂園でありながら、彼等の最も苦しむのは、生活の單調である。どこへ行つても人間の悩みは絶えない。その晩の歓迎會の席上では、みんなの口から同じやうなこ

○移民  
○樂園

○生活の單調

とが繰返された。

- ① Pineapple (鳳梨)
- ② Banana
- ③ Mango
- ④ Papaya
- ⑤ Alligator pear (鱷梨)

わたしはここに來ていろいろな果物を味はつたことを誇りたい。(一) パインアップルやバナナや西瓜のたぐひはいふまでもないが、その外には、マンゴーやパイヤが旨かつた。(二) アリゲーター・ペヤーなどといふ怖しい名の果物も食べた。(三)

— 十番隨筆 —

一一 麥 笛

吉江 喬松

緩やかな傾斜をなして、小さい丘が前に横たはつてゐる。丘には麓から頂まで一面に麥の葉が稍黄ばんで、長くそろつた穂が波打つてゐる。

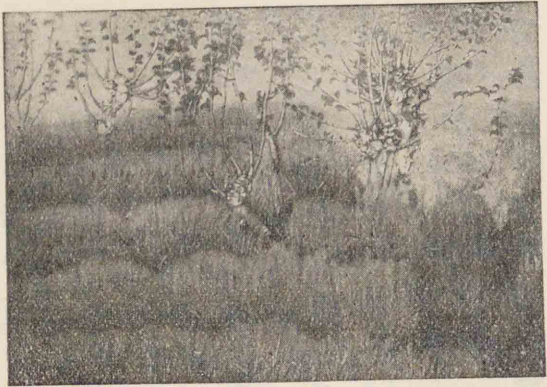


大空はまだくつきりとは晴れてゐない。白い雲が薄い綿を敷きのべたやうに一面に廣がつて、その薄切れした間から、柔かな青空が透いて見える。ほんのりと白い光が天をも地をも包んで、いかにも柔かな感じが、天地の間に充ち満ちてゐる。

丘の麓から少し隔つた麥畑の中に、私は身を横たへて、丘を見上げてゐた。なだらかな丘の頂に波打つ麥の穂が天際を劃して、その後ろにこんもりした黒い森の梢が、半ばより以下は麥の丘に遮られて見える。緩い風がすういすういと麥の葉の上を滑つて行く。薄い白い雲を透かして、さして強くもない日が一面に光を散らす。麥の葉と穂とに取巻かれな

なだらかな天際を劃す

殺風景切實 (Oasis)



丘の麥畑 (小島紫光筆)

がら、草の上に肱を突き頬を支へて、身を低く伸してじつとしてゐると、眞晝の風の麥の葉にささやく言葉も聴取れるばかり静かである。

風の音に耳を傾けてゐると、何とも取留とどのない寂しい、懐かしい思が胸をめぐる。幼時の事や故郷の景色が、眼前を閃くやうにして過ぎる。この甘い、懐かしい回想が、殺風景で切實な現實の中のオアシス(一)であるかのやうな氣がする。

手近な麥の一本を取つて、長い莖を抜いて、莢のやうにな



一しきり

つてゐる所を唇に當てて、息を吹きこんだ。悲しい震へるやうな音を立てて、その麥笛は一しきり鳴つた。また吹いて見た。大豆の葉の茂り合つてゐる畑の間を、隣の村へ通ふ一筋途、その上を夏の正午頃、飴賣の老爺が一種悲しいやうな音を立てて笛を吹いて行つた。我が少年時代の故郷のことが思ひ出されて來た。その飴賣の老爺は今も同じ荷を擔いで、同じ豆畑の間を笛を吹きながら通つてゐるのではあるまいか。

風が少し強く吹いて、麥の葉擦の音が高くさらさら鳴つてゐる。眼を上げて見ると、森の上から丘の彼方へ白い豕のやうな形をした雲が、低く麥の穗波の上を滑るやうに通つ

遊行す

展望す

て行く。雲は畑中に自分が寝てゐるとも知らず、眞晝の静けさに乗じて、遊行し出したのではあるまいか。

丘の頂に立つて向ふを見たら、どのやうな景色が展望されるであらうと思つて、私は立上らうとしたが、またこの眞晝の静けさを破るにも忍びないやうな氣がして、そのまゝ暫くじつとして、草の上に横になつてゐた。

太陽の出る前〔自修文〕

鳥崎 藤村

鳥の世界のお話をしませう。

鳥の世界は暗くて、いつまでも夜が明けませんでした。鷹だの鴉だの、七面鳥だの、鷺だの、それから鶏だのいろいろな鳥が首を長くして、もう夜が明けさうなものだといつてゐました。おや、おや、鷺や、

(一) 詩人、小説家、  
長野縣西筑摩  
郡木曾の人。



夜啼鶯  
ルイチンゲ  
 Nighthale  
 ヨーロッパ全  
 洲にわたつて  
 棲むつぐみ美  
 の小鳥。夜啼  
 の聲と夜啼し  
 してゐる。特長  
 とく

雀や、鴛鴦まで皆と一緒にゐて、御天道様が出るのを待ちました。どうしたのか、いつまで待つても同じだものですから、鷹は待ちくたびれ、鴉は欠伸をし、雀はぶつぶついひ、七面鳥でも、鶏でも、日の光に渴ゑてしまひました。鳥の中でも夜啼鶯は好い聲で夜の歌を歌つてゐました。氣の短い七面鳥などは待遠しがつて、

「鶯はのんきだなあ。いつまであんな夜の歌など歌つてゐる氣だらう。」といひました。

「鳥の世界には夜は明けないのかも知れない。」と鷹がいひ出しました。

「とても私は鷹のやうな氣長なことをいつて、御天道様が出るのを待つてゐられない。」と七面鳥はいひました。

鳥仲間には、黙つてみんなのいふことを聽いてゐるやうな鶯もゐました。鶯は氣の短い七面鳥や、物をほじくりたがる鴉のおしやべりをうるさがつて、獨りで遠い先の方のことを夢に見てゐまし

た。そんなに遠い遠い先の方の日の出の夢を見てゐました。

「どうです、皆さん。」とその時いひ出したのは鴉でした。「一體御天道様は東の方から出るときまつたものでせうか。」

「鴉がまた何かほじくり出した。」といつて、鷹は笑ひました。

「いや、うつかりすると、御天道様は西の空からも、南の空からも出ますぜ。」と鴉がいひました。

「大きにさうだ。私たちは東の方ばかり待つてゐた。どんなすばらしい御天道様が、思ひも寄らない方から出て、西の空から夜が明けないとも限らない。」といふのは七面鳥でした。

いつまで待つても夜が明けないものですから、鳥仲間は御天道様が出る方角さへ迷ひました。そして、がやがやいひ騒ぐうちに、しまひには皆くたびれてしまひました。中でも氣の短い七面鳥や、おしやべりの好きな鴉などは、もう夜明を待つ元氣もないほどに、がつかりしました。



一はい食はさ  
れた  
うまくだま  
された。

「私たちは一生御天道様も見ずに死ぬのだ。」  
七面鳥はこんなことをいつて、鳥仲間を笑はせました。  
そのうちに鶏は他の鳥の知らないやうな力をつかみました。鶏  
は眼を覺したのです。そして夜明の近いことを知つたのです。第一  
に身を起しました。それから鴉のいつたことなどに迷はされずに、  
確かに御天道様が出るのは東の方だと思ひまして、ありつたけの  
聲を出して、勇ましく鳴きました。

途方もない鶏の叫聲に、驚いたのは鳥仲間でした。目頃遠見の利  
くのを自慢にしてゐた鷹の眼にすら、そんな御天道様らしいもの  
は見えもしません。鶏に「はい食はされた」といふのは鴉でした。あ  
の鶏はおほかた寝ぼけたのだらう。」といふのは七面鳥でした。その  
くせ、鴉でも七面鳥でも、夜明を待ちくたびれて、うとうとと半分夢  
を見てゐたのです。

まだ空は暗かつたのですが、しかし、鶏は一度鳴いた自分の聲に

(一)少年用讀本。  
大正十三年東  
京研究社發行

勵まされました。二度目の時をつくる頃には、その鳴聲が深い霧の  
中に響きわたりました。その時になつて鶏は鳴けば鳴くほど、自分  
に力の出てくるのを知りました。いつになつたら夜が明けるかと  
思ふやうな鳥の世界にも朝が來て、あの、あかあかとした御天道様  
が美しい顔をお出しになるのも、もうそんなに遠いことではなか  
らうと思ひました。

(一)をさなものがたり

一二 朝の頌歌

川路 柳 虹

朝は暗れたり、友よ立て、  
空ははるかに色澄みて、  
高き思に曇なき  
聖者の眸しのばしむ。

朝は暗れたり、口すゝぎ、



さなか

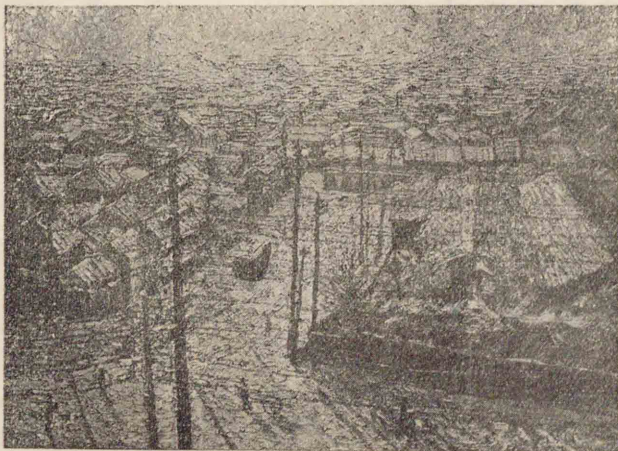
この曉の生まれゆく  
空のさなかに神ありと、  
静かにおもへ、汝が胸に。

ほめ歌

日に照らされて煙るもの、  
速き山なみ、町の屋根、  
今、勞動のほめ歌の  
叫とも聞く汽笛の音。

待む

朝は暗れたり、いざ立たん、  
我等待むはみづからの  
營みつくる力のみ。  
いざわが路を踏みゆかん。



(筆郎大源糸小) 都の根屋

宙を飛ぶ  
(-)ロシヤのバルチック艦隊  
(二)明治三十八年五月二十七日  
旗艦

分擔の事業に當る  
瞬くうち

天に沖す  
威風凛々  
意氣すでに  
露國艦隊を  
呑む

一三 日本海 の 海戦 その一

副直將校宙を飛んで驅來り、『敵艦見ゆ。』との無線電信がありました。と告げたるは、正に午前五時十五分。この時早くも出港用意の信號、旗艦の檣頭に掲げらる。何人も待ちに待ちたる敵艦との出會なり。平生には思ひも寄らざる熱心にして迅速なる動作を以て分擔の事業に當り、用意は瞬くうちに整ひたり。

見わたせば各艦の黒煙天に沖し、さなきだに威風凛々たる我が艦隊は、一層の偉觀を呈して、意氣すでに露國艦隊を呑む。すでにして旗艦三笠を先登とし、敷島、富士、朝日、春日、日



時々刻々  
千載一遇

豪氣

怒濤舷側を  
嚙む

〔對馬と馬關海  
峽との間に在  
る。周回一里。〕

〔Rozhdest—  
vensky,  
バルチック艦  
隊司令長官、  
海軍中將。〕

〔Suvayov,  
戰艦。一三五  
一六噸。〕

〔Aleksandr,  
戰艦。一三五  
一六噸。〕

〔Borodino,  
戰艦。一三五  
一六噸。〕

舳艫相ぶく  
む

匹敵す  
〔Inoh.〕

國家の安危  
をこの一戰  
に賭す  
龍虎相搏つ  
活劇

進の順序を以て我が陣形を整へ、荒浪を蹴つて對馬海峽の東水道に向かふ。かくて進み行くほどに、和泉よりの無線電信は、時々刻々敵の陣形と針路とを報告し來りしかば、千載一遇の時は來れりと、諸士勇みに勇み、豪氣日頃に百倍せり。をりふし南西の風烈しく、怒濤舷側を嚙んで艦の動搖甚だしく、濛氣四方を鎖して、五海里以上を展望する能はず。やがて對馬の北方を過ぎしが、なほ風波の靜まる様子なれば、水雷艇隊に艦隊を離るべき命あり、同隊は避難所に向かひて航し去りぬ。

午後一時三十六分、敵の艦隊を沖の島の西方に見る。ロゼストウエンスキー長官の坐乗せる旗艦スワロフを先登と

して、アレキサンダー三世、ポロヂノ以下九隻これに續き、餘は濛氣の爲に見るを得ざれども、堂々戰列を整へ、鼠色の船體に淡黄色の煙突は、一層その形狀を鮮明ならしむ。舳艫相ぶくみ、黒煙を靡かせて我に向かつて進みくる狀、何ぞそれ勇壯なるや。

艦數に於ては相匹敵し、戰艦及び十二吋主砲の數に於ては彼優り、装甲巡洋艦及び八吋砲の數に於ては我優れる。日露兩艦隊は、國家の安危をこの一戰に賭して、龍虎相搏つ一大活劇をここに演ぜんとす。

一時四十分、旗艦三笠は敵の前路を扼せん爲、針路を變じて敵艦隊に向かひしが、この時檣頭高く、皇國の興廢この一



満を持して  
發せず

序幕は開か  
る

# 興 廢 在

戦に在り。各員一層奮勵努力せよ。との信號翻りたり。全艦隊の士氣爲に大いに振ふ。二時七分、敵まづ砲火を開き、盛に砲彈を放つども、距離遠くして、多くは海中に没す。我は満を持して未だ發せず、烈しき敵の砲火に堪へて、前進を續くること約六分、ここに於て旗艦三笠始めて砲火を開く。これより我が艦隊は適當なる位置を占むる毎に砲火を注ぎ、かくて幾日月待ちに待ちたる海戦の序幕は開かれたり。両軍の砲煙は煤煙と相混じて海上をこめ、

初陣

勝敗の機す  
でに決す

銳鋒

# 此 一 戦

東御夷師  
ま

水中に落つる砲彈の水柱は空を衝き、西も東も轟々耳も聳せんばかりなり。敵は初陣の悲しさ、氣や顛倒したりけん、訓練や足らざりけん、その砲彈多くは命中せず。これに反して、我が各艦より撃出す砲彈はよく敵艦に命中し、その爆裂の爲に黑色の煤煙を揚ぐるること數知れず。かくて二時四十分、彼我主力の第一戦に於て、勝敗の機はすでに決せり。

三時十七分、我が第一戦隊は、全砲火を再び敵の主力艦隊の先頭に注ぎしに、敵は針路を轉じて我が銳鋒を避け、我はこれを追



(一)戦艦。一二六  
七四噸。  
戦列を離る

うて更に砲火を注ぎ、その命中の状、壯快を極む。これより先、敵艦オスラビヤのすでに海戦の初期に於て火災を起し、聊か前部を海中に没しつゝ、戦列を離るゝを見たり。さてこの第二回の激戦に於て、敵艦隊は全く撃破せられ、三時二十三分、旗艦スワロフもまた大火災を起し、戦列を離れて孤立するに至れり。

#### 一四 日本海 of 海戦 その二

孤影を残す  
(二)本文の筆者東郷吉太郎。乗艦は朝日。

第二回の攻撃終りたる後、敵の主隊はいづれへ行きしか、見わたす限り海上は砲煙と煤煙とに包まれ、僅かに旗艦の孤影を残せるのみ。この時余は艦内を巡視せしに、兵員口を

豈んや  
宛然

そろへて、副長おめでたうござります。と述べ、誠に然り、天下豈かくの如き大慶事あらんや。祝辭の交換は單にこのみに止らず、上中甲板到る所皆然らざるはなし。宛然これ歳日の光景なり。

焔煙  
壯絶また凄絶

四時三十分、我が主戦隊はスワロフに砲火を集注しつゝ、通過す。敵はすでに半ば戦闘力を失へる上に、今また砲火を浴びせ掛けられしことなれば、全艦忽ち黒煙に包まれ、焔煙熾に起り、やがて汽罐の破裂したるにや、黒煙蒸氣を交へて昇騰す。その状、壯絶また凄絶。五時八分、我が驅逐艦のスワロフ攻撃のため突進するを認む。この不幸なる戦艦は全部黒煙に包まれたれども、なほ



砲彈の發射を止めず、或は驅逐艦を防禦し、或は艦隊を砲撃して、飽くまでも抵抗す。その意氣や愛すべく、敵ながら歎稱するに堪へたり。

余が艦の砲撃を中止せる時、今は敵艦にたゞ一つ残れる十二ポンド砲の一弾我が前檣に的中し、破片司令塔に飛入り、數人の死傷者を出したり。司令塔内に在りて操舵に従事しるたる一等信號兵曹は、この弾片に右肩を貫かれしが、毫も屈する色なく、傍なる水雷長に向かひ、我が右肩を見て給はれ。といふ。水雷長顧てこれを探りしに、指を没するほどの裂傷にして、顔色すでに蒼白となれるに、なほ左手に舵柄を操つて、艦の運動を過たしめず、交代者の來るを待ちて、始め

操舵  
的の中す  
Pound.



華郎大艇隊東

艦海の海本日



あつばれ

(Drai.)  
彷徨す

て繃帶所に赴きしは、さてもあつばれなる働きぶりかな。

かくて我が艦隊はスワロフに大打撃を加へて過ぎ轉回して再びこれに向かひぬ。途中二檣三煙突なる假裝巡洋艦ウラルの彷徨せるを認め、第一戦隊より全線の砲火を集注したれば、彼は忽ち大火災を起し、焰煙天を覆ふ中に、まづ一煙突倒れ、次に一檣失せ、引續きて第二檣より第二、第三煙突まで悉く壞れ去つて、後部より海中に没し、忽ちにしてまた艦影を認めざるに至りぬ。その間僅かに五分沈没したるは五時五十分なりき。

これより北方に向かひて敵の主隊を搜索せしに、偶、スワロフの北西方に當つて四隻の敵艦を認め、二隻は稍近く、他



の二隻は距離甚だ遠し。我が戦隊はまづ近き二隻に向かつて進み、相並びて砲火を交へ、逃ぐるを追うて戦ふこと大約一時間。七時十八分、敵の嚮導艦ボロヂノは後部に大火災を起して、火光天を焼く。

時に我が旗艦三笠は針路を北方に轉じ、他の諸艦もこれに従ふ。その時富士は煙に包まれたるボロヂノに一彈を送りしに、爆裂して黒煙漲り昇る。誠に見事なる命中なり。續いて余が艦より砲火を注ぎしに、聊か前方に落ちたれば、余は距離を注意する中に、ボロヂノ爆發したりと告ぐるものあり。見ればたゞ黒煙を残すのみにて、終にその沈没の状を目撃すること能はず。以ていかに迅速にその海底に急ぎしか

目撃す

を知るに足るべし。これ恐らくは火薬庫の爆發に因りたるならん。時に七時二十三分。

七時二十五分、戦闘中止の命ありて、我が戦隊は北上す。時に日漸く西に傾き、驅逐艦、水雷艇は敵艦の周圍に集り、各攻撃の位置を擇び、今や遅しと期を待てるものの如し。

嗚呼、二十七日に於ける我等の戦は終りぬ。夕陽すでに天外に落ちて、視界漸く暗し。遙かに南方を顧れば、探照燈の光は波上に交錯し、砲聲般々として、遠雷を聞くが如し。これぞ我が驅逐艦、水雷艇の敵艦攻撃に着手せしものと思しく、八時頃より十時頃まで止まざりしが、遠ざかるに隨ひたゞ波の音のみ高し。

視界  
交錯す  
般々

—東郷吉太郎掃露餘風による—



武士の情 [自修文]

佐藤鐵太郎

(一)海軍中將。山形縣の人。日露戦争には海軍中佐として第二艦隊の先任参謀長であつた。

(二)Vladivostok (浦鹽斯德)

(三)明治三十七年

(四)名は源次郎。鳥取縣の人。

(五)海軍中將上村彦之丞の率ゐる第二艦隊。

暴虐

よこしまで亂暴

僚艦

同一艦隊に屬してゐる軍艦

咫尺さへ辨じ得ぬ

一寸先もわか

はがゆがる

もどかしく思ふ

酷評

ひどい批評。

敵のウラヂヲ艦隊が日本海方面に出没するに及んで、幾多の我が運送船は屢、危難に遭遇した。殊にかの常陸丸の如きは六月十五日この敵の爲に撃沈されて、聯隊長須知中佐を始め、一同海底の藻屑と消えてしまつた。時に恰も同方面警戒の任にあつたのは我が上村艦隊で、いかにしてもこの暴虐な敵の艦隊を撃滅させずにはおかぬといふ意氣込ではあつたが、如何せん濃霧に遮られたり、猛雨に妨げられたりして、偶、敵艦の影を認めても、常に逃足の早い彼を取逃してばかりゐた。

海上に於ては濃霧ほど恐しいものはない。僚艦の姿は勿論、眼前咫尺さへ辨じ得ぬやうになるのだから、このやうな場合、どうして思ふやうな活動ができようぞ。しかし、國民の大部分はそれ等のことは少しも知らぬから、我が上村艦隊の行動をはがゆがつて、いろいろな酷評を浴びせかけてゐた。これを傳へ聞いた司令長官以下

悲憤の涙を絞る。無念に思つて泣く。

敵愾心 敵に對する反抗心

(一)朝鮮慶尙南道東北海岸の都邑

策應する 謀を以て互に相應する (二)海軍大尉山本英輔

將卒の心中は果してどんなだつたらうか。全艦隊の士卒は實に悲憤の涙を絞つたのである。

かういふやうなことで、我々は誰も彼も、その當時の相手たるウラヂヲ艦隊に對しては、實に一種いふに堪へぬ敵愾心を有し、憤怒の情に胸を焦してゐたが、遂にその

積り積つた怨を晴すべき時が來た。かの有名な蔚山沖の海戦が即ちこれである。

上村彦之丞

明治三十七年八月十四日、朝から

ず、誠に靜かな日であつた。この日、我が第二艦隊は、ウラヂヲ艦隊の南下に備へると同時に、旅順を脱出した敵艦隊に對し、東郷艦隊と策應する爲に出動中であつたが、夜が白々と明ける頃、余の休息してゐる所へ山本参謀が飛んで來て、だしぬけに、非常に愉快さうに、





艦橋  
軍艦の前方の  
橋の下で、  
航海中指揮を  
執る所。

髀肉の嘆  
功名をたてる  
に機会がなく  
て、ひまどこ  
まること。

「佐藤參謀、來ました、來ました。」と叫んだ。

「何が來た。」

「敵艦がです。確かに敵艦です。早く早く。」

がばと跳起きて、余は急いで艦橋に驅上つて見た。忽ち余の胸は躍つた。遙か南東の海上に當つて、明らかに三流の煙が見えるではないか。

「敵艦見ゆ。」この勇ましい聲がかゝると、今まで日々夜々髀肉の嘆に堪へなかつた幾多の將士の面上には、紅の血がさつと漲つた。ワーツといふ壯烈な閨の聲が、期せずして全艦に起つた。それといふので、長官の信號につれて、戦鬪の準備は立ちどころにできた。この時に於ける敵側の狼狽はさこそと思はれて、今だにその痛快さを忘れ得ない。

敵は例によつて、いかやうにしてもこの場を逃れ出ようとしたのだが、すでに我が艦隊の爲に退路を斷たれてゐたから、もはや如

硝煙  
大砲の煙。

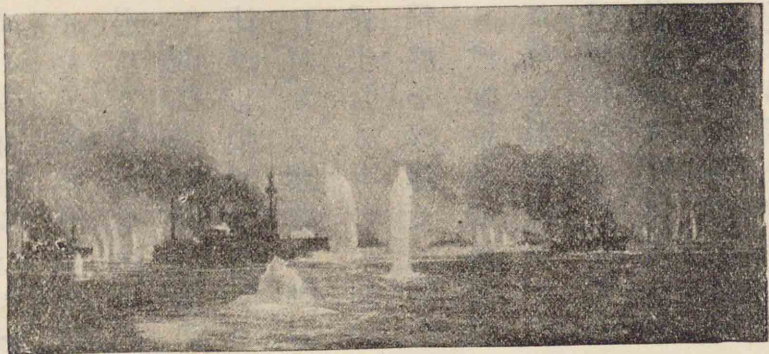
(一) 裝甲巡洋艦。  
九八二六噸。

殿艦  
最後方にあつ  
て追撃を防ぐ  
軍艦。

(二) Rurik  
裝甲巡洋艦。  
一〇九三六噸。

(三) Russia  
裝甲巡洋艦。  
一二一九五噸。

(四) Gromoboi  
裝甲巡洋艦。  
一三三九五噸。



蔚山沖の海戦

何ともすることができなかつた。兩艦隊は次第次第に近づいて、やがて盛な砲撃が開かれた。かくて蔚山沖海戦の幕は切つて落され、濛々と立籠める硝煙の中に、兩艦隊は互に益、接近して、戦を交へたのである。

敵弾の多くは我が上村長官の旗艦出雲を目掛けて集中したのであるが、幸にも身方には僅少な死傷者を出したに過ぎなかつた。これに對して、我が艦隊の砲火の中心目標は、敵の殿艦たるリュウリックであつた。リュウリックは我が猛烈な砲撃の爲に火災を起して、その艦體は次第に傾斜しかけた。敵のロシヤグロン



ボイの兩艦はこれを救はうとして、敵ながら勇敢な奮闘ぶりを見せたが、終に施すべき術もなく、リューリックを見棄てて、懸命に逃走してしまつた。

私憤を洩らす  
個人的の憤を  
外部にあらは  
す

戦は見事我が軍の勝利となつて、ここに今までの怨は晴された。沈没したリューリック號の乗組員は、悉くこれを我が艦に收容したが、その捕虜に對して萬一私憤を洩らすやうなことがあつては、武士たるものの情が缺けることになるから、我が上村司令長官は、「捕虜を厚遇せよ。」との信號を發せられた。

厚遇  
手あつくもて  
なす

愈、戦果てて後、收容した捕虜の中には、大分重態の負傷者もあつたから、治療所まで行つて見ると、數多の我が士卒が眞黒に寄集つてゐた。余は思はずもはつとした。平素から怨重るロシヤ艦隊の負傷兵のことであるから、その怨を晴す爲に、若しや悪意のあることでもやつてゐるのではないかと思つたのだ。そこで思はず、待て。待て。」と叫びながら、水兵たちの間を掻分けて中に入つて見たが、その

場の有様を目撃して、余は我知らず涙ぐむまでに嬉しく感じた。そこには、手足がなかつたり、命もどうかと危まれるやうな多數の敵の重傷者が寝かされてゐたが、我が水兵たちはこれを取巻いて、扇を以てこれ等敵の負傷兵を煽いでやつてゐるではないか。八月の大暑の最中、誰しも暑さに汗が流れる。ましてや手も足も利かぬこれ等の負傷兵の身になれば、どんなに暑くて苦しいか、到底想像もできないほどだらう。余はこの光景を目撃すると同時に、感激の餘り、

「お前方は實に善いことをしてくれ。よく勞つてやれ。」といふと、そこにゐた水兵の一人が、

「此奴等は憎い奴ではありましたが、けれども、かうなつてはかはいさうです。」と答へた。

「さうだ。さうだ。」と余は實に感心してうなづいた。これこそほんたうに情を知る日本國民性の流露で、この上の美しいことがまたと

國民性  
國民の氣質  
流露  
あらはれ



世にあらうかと思つた。凡そ人として一番大切なことは、弱者に對して慈悲心のあることである。この點については、日本人は遠い昔から、他の國々の人よりよほど優れてゐる。そしてこの美しい慈悲心が、をりに觸れ時に應じて發する。この蔚山沖の大海戰に於ても、誠に遺憾なくそれが表現されてゐるのだ。

仔羊を狙ふ豺狼の如く、日本海に出没して、幾多の我が運送船にあらゆる危害を加へた敵のこの艦隊。これまで幾度も幾度も取逃した爲に、一時は國民から酷評までされた我々に取つては、怨の重なるこの敵に對して、若しこの場合、我が士卒に眞に眞心からの憐みがなかつたならば、必ず酷い取扱方をしてゐるに相違ない。然るに、「かうなつてはかはいさうだ」といつて、懇に勞つたといふことは、取りも直さず大和魂の發露でなければならぬ。武士道の發揮でなければならぬ。たゞ強いばかりが武士ではない。軍に勝つばかりが武士ではない。強いと共に情がなければならぬ。これ等の下士卒は別

躊躇  
ためらふ。  
心ばへ  
心持。

段に立派な教育を受けたものではないが、かういふ場合に當つて、躊躇なしにこの擧に出たといふことは、武士たるものの情、日本國民の眞の心ばへでなければならぬ。日本人はこの心持を失つてはならぬのである。

一五 猫の作戰計畫

夏目漱石

我が輩はとうとう鼠を捕ることに極めた。

元氣旺盛

元氣旺盛な我が輩のことであるから、鼠の一匹や二匹は、捕らうといふ意志さへあれば、寢てゐてもわけなく捕れる。今まで捕らなかつたのは、捕りたくないからのことだ。

花吹雪

春の日はきのふの如く暮れて、をりをりの風に誘はれる。花吹雪が、臺所の腰障子の破から飛びこんで、手桶の中に浮



Lamp.

かぶ影が薄暗い勝手用のランプの光に白く見える。今夜こそ大手柄をして、うち中驚かしてやらうと決心した我が輩は、豫め戦場を見廻つて、地形をのみこんで置く必要がある。戦闘線は勿論餘り廣からうはずがない。疊數にしたら、四疊敷もあらうか。その一疊をしきつて、半分は流し、半分は酒屋や八百屋の御用を聞く土間である。へつつひは貧乏勝手に似合はぬ立派なもので、赤の銅壺がぴかぴかしてゐる。その後の羽目板との間二尺が、我が輩の鮑貝あわびの所在地である。茶の間に近い六尺は、膳、碗、皿、小鉢を入れる戸棚となつて、狭い臺所をいとど狭くしきつて、横に差出た剥出しの棚と、すれすれの高さになつてゐる。その棚の下に、播鉢はくが仰向に置か

羽目板

いとど

すれすれの  
高さ

交叉す  
自在  
大様に動く

れて、中には小桶の尻が我が輩の方を向いてゐる。大根卸、播粉こ木が並べて懸けてある傍に、火消壺が置いてある。眞黒になつた椽の交叉した眞中から、一本の自在を下して、先には平たい大きな籠を懸けてある。その籠が時々風に揺れて、大様に動いてゐる。

便宜  
てんで

これから作戰計畫だ。どこで鼠と戦争するかといへば、無論鼠の出る所でなければならぬ。いかに此方に便宜な地形だからといつて、一人で待構へてゐては、てんで戦争にならぬ。ここに於てか鼠の出口を研究する必要が生ずる。どの方面からくるかな。と、臺所の眞中に立つて四方を見廻す。何だか東郷大將になつたやうな心地がする。下女はさつき湯に



書齋

行つて、歸つて來ぬ。子供は疾くに寢た。主人は相變らず書齋に引籠つてゐる。細君は何をしてゐるか知らない。時々門前を人力が通る、通り過ぎた後は一段と寂しい。我が決心といひ、我が意氣といひ、臺所の光景といひ、四邊の寂寞といひ、全體の感じが悉く悲壯である。どうしても猫中の東郷大將としか思はれない。かういふ境涯に入ると、もの凄いな中に一種の愉快を覚えるのは、誰しも同じことであるが、我が輩はこの愉快の底に、一大心配が横たはるのを發見した。鼠と戦争するのは覺悟の前だから、何匹來てもこはくはないが、出てくる方面が明瞭でないのは不都合である。周密に觀察して見ると、鼠賊の侵入するには三つの路がある。彼等が若しど

悲壯

周密

吶喊す  
遣過す

ぶ鼠であるならば、土管に沿うて、流しからへつつひの裏手へ廻るに相違ない。その時は火消壺の蔭に隠れて、歸路を斷つてやる。或は溝へ湯を抜く漆食の穴から風呂場へ廻つて、勝手へ不意に飛出すかも知れない。さうしたら釜の蓋の上に陣取つて、眼の下に來た時、上から飛下りて一攫にする。それからと、またあたりを見廻すと、戸棚の戸の右の下隅が半月形に食破られて、彼等の出入に便なるかの疑がある。鼻をつけて嗅いで見ると、鼠臭い。若しここから吶喊して出たら、柱を楯に遣過して置いて、横間からあつと爪をかける。若し天井から來たらと、上を仰ぐと、眞黒な煤がランプの光で輝いて、地獄を裏返しに吊した如く、ちよつと我が輩の手際で



警戒を解く

懸念

自信

論據

は、上ることも下ることもできぬ。まさかあんな高い所から落ちてくることもなからうからと、この方面だけは警戒を解くことにする。それにしても三方から攻撃される懸念がある。一口なら片眼でも退治して見せる。二口ならどうにかうにか遣つてのける自信がある。しかし、三口となると、我が輩も手のつけやうがない。どうしたらよからう。どうしたらよからうと考へて、好い智慧が出ない時は、そんなことは起る氣遣はないと極めるのが、一番安心を得る近道である。また法のつかないものは、起らないと考へたくなるものである。我が輩の場合でも、三面攻撃は必ず起らぬと斷言すべき相當な論據はないのであるが、起らぬとする方が、安心を

得策  
煩悶

成算

當惑す  
Baltic

得るに便利である。安心は萬物に必要である。我が輩も安心を欲する。よつて三面攻撃は起らぬと極める。それでもまだ心配が取れぬから、どういふものかとだんだん考へて見ると、漸くわかつた。三個の計略の中、いづれを選んだが最も得策であるかの問題に對して、自ら明瞭な答を得るに苦しむからの煩悶である。戸棚から出る時には、我が輩これに應ずる策がある。風呂場から現れる時には、これに對する計がある。また流しからはひ上る時には、これを迎へる成算もあるが、その中どれか一つに極めねばならぬ。こゝになると、大いに當惑する。東郷大將はバルチック艦隊が對馬海峽を通るか、津輕海峽へ出るか、或は遠く宗谷海峽を



智謀を運らす  
夜は浅い

休養

(1) Portugal.  
(葡萄牙)

(2) Holland.  
(和蘭)

(3) 長崎縣(肥前國)

北松浦郡。元

三年(二二

品貿易場と定

められた。

(4) 徳川時代長崎

に在ったオランダ人の居留

地。

盤踞す

暗示

廻るかについて、大いに心配された。さうだが、今我が輩自身の境遇から想像して見て、御困却の段、實にお察し申す。我が輩はかく夢中になつて、智謀を運らしてゐる。夜はまだ浅い。鼠はなかなか出さうにない。我が輩は大戦の前に一休養を要する。

吾輩は猫である

一六 日本人の今昔

幣原 坦

ポルトガル人は鐵砲を傳へ、オランダ人は醫學を傳へて、西洋文明の價値を我が國に認めしめたことは古い話であるが、オランダ人が平戸から出島に盤踞して、我が國との貿易を獨占するについては、種々な暗示を我が國に與へてく

(1) 幕末の志士。長門藩士。安政六年(一八五九年)斬首せられた。年二十九。

(2) Commodore Perry.

米國の水師提督。

日本に來て浦賀に上陸した。

松陰が渡米を企てたのは、安政元年(一八五四年)の來航の時。

度(西曆一七九八年)。

(3) 慶應二年。

(4) 伊勢佐太郎と沼川二郎との二人。

(5) New York. (紐育)

(6) Guido Fridolin Verbeek.

オランダ人。安政六年宣教師として我が國に來た。明が治三十一(一八六〇)年東

れた。我が國人は文明の進歩した西洋人に國を奪はれることの可能性が多いのを見て、何とかして國を護らねばならぬ必要に氣がついた。國を封鎖して耶蘇教を禁じ得た間はよかつたが、幕末に大勢が急轉して、もはや長夜の眠から覺めざるを得なくなつた。吉田松陰がペリー一行に附隨して米國に渡ることを企てたのも、これによるのである。

(三) 一八六六年、突然二人の日本青年がニューヨークのオランダ派の傳道事務所<sup>(四)</sup>に現れた。幹事が驚いて來意を尋ねると二人がいふに、自分等はフルベッキ先生に英語を習つて、歐洲に渡つて見たが、遅かれ早かれ、日本は歐洲の餌食とならねばならぬ。今の中に大船巨砲の製造法を學ばないと國



京で死んだ。  
年六十九。

(1) New Jersey.  
米國大西洋岸  
の州。

(2) Rutgers.

(3) New Haven.

○  
脅迫す  
○  
氣慨

が亡びるから、それを學びたさに、大西洋を渡つて米國に來  
ました。幹事はとにかくそのいふがまゝに、<sup>(1)</sup> ニュージャシー  
ーのラトガーズ大學の附屬中學に入學させたといふ。これ  
誠に、當時の日本人の考をよく告白してゐるものである。  
或時<sup>(2)</sup> ニューヘーブンに町田といふ日本青年があつた。某  
將軍の塾に宿泊してゐたが、米國の學友に耻辱を與へられ  
たといふので、將軍に請うていつた、自分の同窓生の一人は、  
自分に耻辱を與へました。どうぞ短刀を以て復讐すること  
を許して下さい。凜然たる日本青年の當年の氣慨をよく表  
してゐる。さうして勝手に同窓生を脅迫せずして、監督者の  
許可を請うてゐるところなどは、さすがに情を抑へる武士

○  
維新  
皇謨を翼賛  
す

(1) 明治四年岩倉  
具視を大使と  
して歐米へ遣  
された。

(2) 上田梯子、吉  
益亮子(十六  
歳)、山川捨松  
(十二歳)、永井  
繁子(十歳)、津  
田梅子。

○  
鬱勃たる氣  
魄

○  
烏兎匆々

氣質が顯れて、人を感動せしめる。

このやうな氣分で、維新の際、我が國人は皇謨をも翼賛  
し得たのである。男子ばかりかと思ひきや、一八七一年岩倉  
大使一行に附隨して、健氣にも渡米した五名の女子さへあ  
つた。そのうちの年長者は上田梯子で、それが漸く十八歳最  
も若かつた津田梅子は、まだ九歳の小兒であつた。日本人の  
鬱勃たる氣魄は、徳川氏三百年の鎖國を以てしても、消磨せ  
しめることができなかったのである。

果せるかな、維新當時の遊學の目的たる護國の心願は、見  
事に達成された。烏兎匆々五十年、先人のあとを追うて米國  
に遊學するものは數限りもない。否、遊學ばかりでなく、米國



不毛の地

に渡つて不毛の地を開墾し、砂山を變じて立派な農園たらしめ、不健康地を變じて樂園としたものも決して少くない。今日日本人が野菜を作り果實を生熟せしめつゝある土地の多くは、もと米國人の見捨ててゐた所であるといふ。

遊學に行つたものは、主として東岸に赴いたが、農業その他働く目的で行つたものは、多く西岸に落着いた。落着いて農業その他に従事したものの、さて骨をカリフォルニアの野に曝さうとするものは、至つて少かつた。何となれば、彼等は言葉も通じない異國の土になるよりも、親子兄弟の國に歸りたいと思つたからである。しかし、一旦渡つたからには、さう容易に歸られるものではなかつた。氣候と戦ひ、困難と

California.  
米國太平洋岸、  
氣候が温和で、  
農業、鑛業、林  
業が盛に行は  
れる。

戦ひ、勤勉、勞苦半世紀の運命を開いた。實に米國の西岸ほど日本人が農墾に成功した地はないともいへる。

彼等が米國人とかけ離れて、一種特別な部落のやうになつてゐるからとて、あながちに咎めること勿れ。彼等はその生立に於て、異國の言語や風俗に馴れなかつたのである。特殊な部落にもならず、またむやみな送金もせず、米國の社會に立派に働き得る人は、これを現代の青年に待つて然るべきである。

—世界の變遷を見る—

一七 小 景

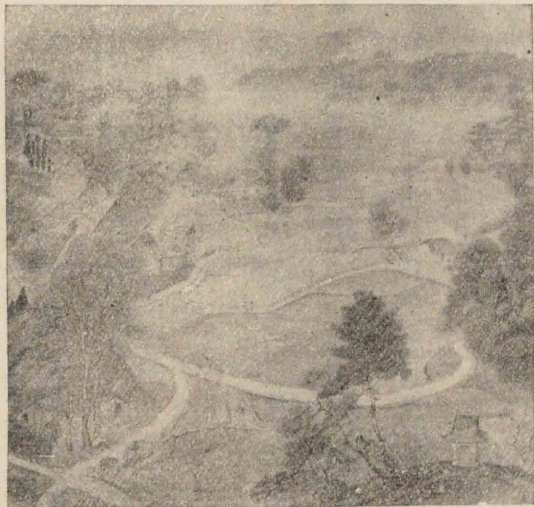
千家 元磨

川は靜かに流れてゆく。



せゝらぎ

川の岸には小草の繁茂した堤がある。  
 その堤の向ふには麥畑や青田がつゞき  
 森や百姓家が散在する。  
 百姓は麥を刈つたり、苗を  
 植ゑたり、  
 みんな何かして働き動い  
 てゐる。  
 静かだ、たゞ川のせゝらぎ  
 がするばかり。  
 じつと聴いてゐると引入  
 れられさう。  
 燕が空中にさへづつて飛ぶ、  
 風が堤の草をなでて吹亂す。



(筆陽三岩平)ふは賑は村頃の秋麥

草はみんないきいき伸びてゐる。  
 小さい花がつゞましく咲いてゐる。  
 名もない小草の花のしたはしさ。  
 花たちは實に無心で咲いてゐる。  
 造られたまゝに自然に自由に。  
 すべてが自然で美しい。

— 炎 天 —

### 一八 汝の母より

姉崎 正治

今次  
 (1) Britain.  
 (英吉利)  
 (2) Deutschland.  
 (獨逸)

今次の世界大戰に於て、イギリスの一飛行士官が、敵たる  
 ドイツの飛行機を射落した時のことである。彼は敵機の地  
 に落ちるのを見ると共に、それに乗組んでゐる敵兵のこと  
 を思ひ、敵の塹壕前ながら、敵機の跡を追うて着陸した。敵機



飛翔す

もののあはれ

〔Pocket〕

一葉

武運強し

は翼を折つて破れ、乗組士官の體は地に横たはつて、呼吸はすでに絶えてゐた。敵ながら今まで空中に飛翔してゐた人のことを思ひ、もののあはれを覺えて、その死體を片付けてやらうと、胸のポケット(一)の邊にさはると、そこに一つ堅いものがあつた。これを搜り出して見ると、一葉の寫眞で、それには女の手で「汝の母」と書いてある。即ち今戦死した士官は、空中戦にも常にポケットに母の寫眞を藏してゐたのを見て、その士官は一層のあはれに堪へず、まづ敵の死體を身方の塹壕にもたらし、然る後再び自分の機に乗じて、なほ一戦した。その日の戦にも、イギリス士官は武運強く、安全に身方の戦線の後に歸つた。

感慨



空中戦の光景

その後イギリス士官は、この射殺した敵とその老母とのことを思ひ、それにつけても自分の身の上、且つは早くに亡くなつた自分の母のことを考へ、感慨に堪へず、敵士官の姓名をたどつて、彼が母へ一書を送つた。その書面は次の通りである。

「自分はイギリスの飛行士官です。何月何日、私は敵たるドイツの一飛行機を射落しました。その敵兵が死ぬまで母御の寫眞を大切にポケットに藏してゐたのを發見し、その母御たるあなたにこ



の手紙を差出します。

殘忍  
偵察す  
敬意を表す  
無量の感に  
打たれる

私はあなたの御子息を殺しました。しかし、その人を憎んだのでもなければ、その人の母御たるあなたのお悲みを知らないはずもないのです。たゞ戦争といふ殘忍な仕事に於て、これは私の義務でした。敵士官即ちあなたの御子息が、身方の陣地を空中から偵察して無事に歸られたなら、その結果、身方は反對に攻撃を受けて、幾人かの兵は、その爲に命を失つたでせう。この不幸を防ぐ爲に、私は敵機を射落しましたが、その乗組士官の身體に敬意を表し、それを片付けようとする時に、その人の母御たるあなたの寫眞を發見して、無量の感に打たれたのです。

いとし

私は子供の時に母を喪ひ、今でも人に母親があるのを見て、羨ましく思ふのですが、私の殺した敵士官には、あなたといふいとしの母親があり、死ぬまでその寫眞を抱いて居られたのを見ては、自分はずつとしては居られません。殺した私の手紙を見ては、口惜しくも思はれませうが、私としては、かの人の母御に對して、恰も自分の母に對するやうな親しい感じを、悲みの中にも禁じ得ません。私がかの人を殺したのは、戦争といふ殘忍な悪魔のしたことです。あなたも、また亡くなつたあなたの御子息も、このことを思つて、私の殺人を赦して下さるでせう。さうしてまた、かの人の亡くなつた代りに、私に一人の母を得た



## 中立國

やうな思のあるのを察して下さるでせう。今私の書くこの手紙は、かの人と私と二人の魂が、一緒になつて書くのだと思つて下さい。もうこれ以上には書けません。涙で眼は曇り、筆を執る手も震へて書けません。

この手紙はイギリス軍の本營から、中立國の手を経て、ドイツ國內の宛名の人に届いた。一人の兒を喪つた母がこれを讀んだ時の感は、思ふも涙の種である。さうしてこの婦人は、數日の後長い手紙を書いて、かのイギリス士官へ送つた。その大意は下の通りであつた。

「御手紙の着く前に、子供の戦死は知つて居りましたが、その戦死の相手たるあなたの情深い御手紙を見た時の私

## 述懐

## 蘇生

## 畢竟

の思は御察し下さい。通常ならあなたを子供の仇といふところですが、御述懐に接しては、その仇が反つて子供の蘇生となつて、この母に手紙を寄せてくれたやうに思はれます。あなたが子供の懐にあつた私の寫眞に對して、亡き母御に對する心持がするといはれるやうに、あなたの御手紙は、私にとつては、戦死した子供の手紙としか思はれません。あなたは子供を殺したといはれ、また事實その通りに違ひないことは知つてゐますが、殺すも殺されるも、共に各の國の爲で、人として何等怨のあるわけでないのは、お互に明白なことでせう。その怨もないものが互に殺さうとするのは、畢竟は戦争の爲ですが、これについて



は、私は何も申しません。たゞ仇といふべきあなたが私を母のやうに思ひ、私もまたあなたが死んだ子供の身代りのやうに思はれるのは、何たる不思議なことでせう。私には三人の男の子があり、戦死したのはその末子ですが、兄二人もやはり戦線に出てゐて、いつ弟と同じ運命になるとも計られません。しかし、私は末子の戦死した爲に、あなたといふ新たな子を得ました。戦争が濟み平和の時が來、さうして兄二人も無事に歸ることがあれば、私はあなたにもこの家へ一度來て戴きたいと思ひます。二人の兄もあなたを弟と思つて迎へるでせう。その時には、あなたは、死んだ子供とあなたと二人分の子として弟として、私の

註釋

家庭にいつまでも滞在して戴きたい。その日の早くくることを神に祈ります。さうして最後には「汝の母」とかの寫眞に書いてある通りに書いてあつた。

この事實だけで十分である。一々註釋を要しない。人情の美は、眞心によつて此の如く結び附くのである。――光あれ――

一九 漢土雜話

韓伯瑜(一)といふ人、父を喪ひて、母と二人して住めり。母は至りて嚴しき人にて、伯瑜に少しの過あれば、杖もて鞭うつを常とす。伯瑜痛さを忍びて、少しも怨める色なし。或日母例の

り二十二

(一)支那漢の代人。

書取 意味 讀う

十九課ヨ 課ま 考者 韓伯瑜 (孝行)



如く鞭うつに、伯瑜泣くこと頻りなり。母怪しみてその故を問へば、「これまで鞭うたる、毎に痛かりしかど、けふの痛からぬは、母の年老いて力衰へ給へる故なりと思ひ、心弱くなりて泣くなり」といへり。

延陵の季子<sup>(一)</sup>といふ人、或時その君の使にて他國へ行く途にて、徐の君を訪へり。徐の君つらつら季子の劔を見て、口にこそ言出でざれ、欲しと思ふ色面に顯れたり。季子心には察しながら、君命を奉じて使する途なればと思ひて與へず。使の事終りて、歸路に立寄りて見れば、徐の君すでに死したり。季子大いに悲しみ、かの劔をその墓の傍の樹に結び附けて歸りぬ。從者怪しみて、「徐の君すでに死せり。墓に掛けて誰に

(一)今の江蘇省蘇常道丹陽縣。  
(二)支那吳の代の人、季札のこと。  
(三)その頃支那にあつた一小國の名。

延陵の  
季子  
文情

與へ給ふぞ」といへば、「我さきに心の中にて與へんと思ひ定めたれば、その人死したりとも、初の志を變ふべきにあらず」といへり。

晏嬰<sup>(一)</sup>といふ人、齊の國の相となれり。その御者馬に鞭うちて自得せる色あり。御者の妻これを見て夫にいふやう、「晏子は身の長六尺にも満たず、一國の相として、その名天下に隠れなければ、思慮深ければ、出入にも人に下る様子あり。良人は身の長八尺、御者となりて誇らしき色あるは、あさましからずや。夫大いに耻ぢて、これより大いに慎みしかば、嬰はその志を賞して、次第に高官に任用したりといふ。」

文天祥<sup>(二)</sup>が勤王の師を擧げし時、友ありて止めていへるは、

(一)支那の齊の賢相。齊は今の山東省に都した國。  
自得す

誇らしき色あさまし

(二)南宋の忠臣。勤王の師

夫婦の  
道



群羊猛虎を撃つ

天祥  
忠義

身を以て國に殉ず

風を聞いて起つ

宗社

「今敵兵三道より内地に薄る。君が小兵を以てこれに赴かんとするは、群羊の猛虎を撃つに似たらずや。」と天祥答へて、國家今日の急に天下の兵を召すに、一人一騎の赴くものなきこそ口惜しけれ。我が力の足らざるを知らざるにあらず。身を以て國に殉じ、天下の忠臣義士をして、風を聞いて起たしめんとするのみ。」と聞くもの感動せざるはなかりき。軍敗れて虜となるに及び、敵天祥に問ひていはく、「君すでに宗社の保つべからざるを知らながら、なほ力をつくせしはいかに。」と天祥いはく、「父母病あらば、快復の望なくとも、誰か一日も薬を廢せんや。救はれざりしは天命のみ。」と遂に刑せられて死せり。

— 高等小學讀本 —

(一)文學士。小説家。東京の人。

蜘蛛の絲 (自修文)

(一)あぐたがは 芥川龍之介

或日のことでございます。御釋迦様は極樂の蓮池の縁を、獨りてぶらぶらお歩きになつていらつしやいました。池の中に咲いてゐる蓮の花は、みんな玉のやうに眞白で、その眞中にある金色の薬からは、何ともいへない佳い匂が、絶間なくあたりへ溢れて居りました。

極樂はちやうど朝でございます。

やがて御釋迦様はその池の縁におたゞずみになつて、水の面を蔽つてゐる蓮の間から、ふと下の様子を御覽になりました。この極樂の蓮池の下は、ちやうど地獄の底に當つて居りますから、水晶のやうな水を通して、三途の川や針の山の景色が、まるでのぞき眼鏡を見るやうには、つきりと見えるのでございます。

(二)地獄へ赴く途に在るといふ。瀬川、また三つどともいふ。 (三)地獄に在る。生前惡業を行つたものは、この山に追上げられるといふ。



うごめく  
蟲などの動く  
やうにうよ  
うよする。

するとその地獄の底に犍陀多といふ男が一人、外の罪人と一緒にうごめいてゐる姿が、御眼に止りました。この犍陀多といふ男は、人を殺したり、家に火をつけたり、いろいろ悪事を働いた大どろばうでございしますが、それでもたつた一つ善いことをした覺がございします。と申しますのは、或時この男が深い林の中を通りますと、小さい蜘蛛が一匹、路端をはつて行くのが見えました。そこで犍陀多は早速足を舉げて、踏殺さうといたしましたが、いや、これも小さいながら、命のあるものだ。その命をむやみにとるといふことは、いくら何でもかはいさうだ。と、かう急に思ひ返して、とうとうその蜘蛛を殺さずに、助けてやりました。

御釋迦様は地獄の様子を御覽になりながら、この犍陀多には蜘蛛を助けたことがあるのをお思ひ出しになりました。さうして、それだけの善いことをした報には、できるならこの男を地獄から救ひ出してやらうとお考へになりました。幸ひ側を御覽になります。

と、翡翠のやうな色をした蓮の葉の上に、極樂の蜘蛛が一匹、美しい銀色の絲をかけて居りました。御釋迦様はその蜘蛛の絲をそつと御手にお取りになりました。さうして、それを玉のやうな白蓮の間から遙か下にある地獄の底へ、眞直におおろしなさいました。

二

こちらは地獄の底の血の池で、外の罪人と一緒に浮いたり沈んだりしてゐる犍陀多でございします。何しろ、どちらを見ても眞暗で、たまにその暗闇からぼんやり浮上つてゐるものがあると思ひます。それは恐しい針の山の針が光るのでございしますから、その心細さといつたらございしません。その上、あたりは墓の中のやうに、しんと静まり返つてゐて、たまに聞えるものといつては、たゞ罪人がつく微かな溜息ばかりでございします。

これは、ここへ落ちてくるほどの人間は、もうさまざまな地獄の責苦に疲れはてて、泣聲を出す力さへなくなつてゐるのでござい



ました。ですから、さすが大どろぼうの犍陀多も、やはり血の池の血に咽なせびながら、まるで死にかゝつた蛙のやうに、たゞもがいてばかり居りました。

ところが、或時のことでございます。何な氣なく犍陀多が頭を擧げて、血の池の空を眺めますと、そのひつそりとした闇の中を、遠い遠い天の上から、銀色の蜘蛛の絲が、まるで人目にかゝるのを恐れるやうに、一筋細く光りながら、するすると自分の上へ垂れて参るでございませぬか。犍陀多はこれを見ると、思はず手を拍たつて喜びました。この絲にすがりついてどこまでも昇つて行けば、きつと地獄からぬけ出せるのに相違ございませぬ。いや、うまく行くと、極樂へはいることさへもできませう。さうすれば、針の山へ追上げられることもなくなれば、血の池に沈められることもあるはずはございませぬ。かう思ひましたから、犍陀多は早速その蜘蛛の絲を両手でしつかりとつかみながら、一いっ所懸命けんめいに上へ上へと、たぐり昇り始

めました。元より大どろぼうのことでございますから、かういふことには、昔から馴れきつてゐるのでございます。

しかし、地獄と極樂との間は、何萬里となく隔つてゐるものですから、いくらあせつて見たところで、容易に土へは出られません。稍暫く昇る中に、とうとう犍陀多もくたびれて、もう一たぐりも、上方へは昇れなくなつてしまひました。そこで、し方がございませぬから、まづ一休み休むつもりで、絲の中途にぶら下りながら、遙かに目の下を見おろしました。すると、一いっ所懸命けんめいに昇つたかひがあつて、さつきまで自分がゐた血の池は、今ではもういつの間にか、闇の底に隠れて居りました。それから、あのぼんやり光つてゐた恐しい針の山も、足の下になつてしまひました。この分ぶんで昇つて行けば、地獄からぬけ出すのも、存外ぜんがいわけがないかも知れませぬ。

犍陀多は両手を蜘蛛の絲にからみながら、ここへ來てから何年にも出したことのない聲で、しめたしめた。と笑ひました。ところが、



ふと氣がつきますと、蜘蛛の絲の下の方には、數限りもない罪人たちが、自分の昇つた後を附けて、まるで蟻の行列のやうに、やはり上へ上へと一心に攀昇よぢのぼつてくるではございせんか。犍陀多はこれを見ると、驚いたのと恐いので、暫くはたゞばかりのやうに大きな口を開いたまゝ、眼ばかり動かして居りました。

自分一人できへ切れさうなこの細い蜘蛛の絲が、どうしてあれだけの人數の重みに堪へることができませう。萬一、途中で切れたといたしましたら、せつかくここまで昇つて來たこの肝腎かんじんな自分までも、もとの地獄へ逆落さかおしに落ちてしまはなければなりません。そんなことがあつたら、大變でございます。

が、さういふうちにも、罪人たちは何百となく、何千となく、眞暗な血の池の底から、うようよとはひ上つて、細く光つてゐる蜘蛛の絲を、一列になりながら、せつせと昇つて參ります。今のうちにどうかしなければ、絲は眞中から切れて落ちてしまふに違ひありません。

そこで犍陀多は大きな聲を出して、

「こら罪人ども、この蜘蛛の絲はおれのものだぞ。お前たちは一體誰の許を受けて昇つて來た。下りろ。」と喚わきました。

その途端つたんでございます。今まで何ともなかつた蜘蛛の絲が、急に犍陀多のぶら下つてゐる所から、ぷつりと音を立てて切れました。ですから犍陀多もたまりません。あつといふ間もなく、風を切つて獨樂ごらくのやうにくるくる廻りながら、見る見るうちに闇の底へ、眞逆まごさか様に落ちてしまひました。後にはたゞ極樂の蜘蛛の絲が、きらきら細く光りながら、月も星もない空の中途に、短く垂れてゐるばかりでございます。

三

御釋迦様は極樂の蓮池の縁に立つて、この一部始終いちぶしじうを、じつと見ていらつしやいました。が、やがて犍陀多が血の池の底へ石のやうに沈んでしまひますと、悲しさうな御顔をなさりながら、またぶら

一部始終  
始から終まで  
のこらず



頓着  
氣に掛ける。

ぶらお歩きになり始めました。  
自分ばかり地獄からぬけ出さうとする健陀多の無慈悲な心が、さうしてその心相當な罰を受けて、もとの地獄へ落ちてしまつたのが御釋迦様の御目から見ると、あさましく思し召されたのでございませう。しかし、極樂の蓮池の蓮は、少しもそんなことには頓着いたしません。その玉のやうな白い花は、御釋迦様のおみ足のまはりに、ゆらゆらと萼を動かして居ります。そのたんびに、眞中にある金色の薬からは、何ともいへない佳い匂が、絶間なくあたりへ溢れ出ます。

極樂ももうお午ひるに近くなりました。

— 傀儡師 —

(一)芥川龍之介の  
短篇小説集。  
大正八年東京  
新潮社發行。

二〇 かんにん

柳澤 淇園

文盲

或人、文盲なるものを意見して、世の交は他のことはいらず、たゞ「堪忍」の二字をよく守るべし。といへば、文盲の人は頭を傾け、「かんにん」とは四字にてはべらずや。と、指をもて數へ、「御許には思しちがひなるべし。かんにん」と四字にてはべり。といへば、意見せし人いはく、愚昧の人かな。堪忍とは「たへしのぶ」と讀みて、二字なり。といへば、また頭を傾け、「たへしのぶ」ならば、また一字殖えたり、五字となりぬべし。何と仰ありとも、我等は四字と思ひはべれば、四字にてかんにんはいたしはべるなり。といへるに、その人またいはく、汝の如き愚昧の文盲は、實に諭しがたし。人に似て蟲同様なり。おのれがまゝにすべし。と大いに憤りければ、文盲の人笑ひて、何とも仰あ

愚昧



るべし。我等は「かんにん」の四字を知りはべれば、悪口せられ  
ても、少しも腹立ちはべらざるなり。」とて笑ひきとぞ。

二

余が友としける平澤何某といふ士は、堪忍づよき人にし  
て、或時主用ありて、人多く具して行きける道のほどにて、二  
階より齒磨をつかひて吐きたる唾の過ちて平澤が着せし  
上下にした、かにかゝりたれば、供人大いに憤り、その家に  
入り唾を吐きかけたるものを引出さんとす。平澤とゞめて、  
しばしこの家を借るべしとて、その家に入りて、挾箱より着  
替の上下を取出して着替へけるに、その家のものども大勢  
出でて詫ぶるにぞ、平澤申しけるは、「過なるべし。重ねて心を

した、か

些細

つくべし。」とて出行きぬ。供人いひけるは、「いかでそのまゝに  
赦し置き給へるぞ。」といへば、「けふは大切なる主用なり。かゝ  
る些細のことにひま取るべきにあらず。我が常に守れる堪  
忍はこのことなり。」といへり。その後また私用ありて、その供  
人を引連れ出でけるに、をりしも夏の頃、溝のけがれ水を打  
ちけるが、平澤が袴の裾より下をけがせり。またまた供人大  
いに憤り、すでに打擲にも及ばんとせしを、おし止めて行き  
ければ、供人申しけるは、「いふがひなきことにて候。」といふに、  
「さにはあらず。けふは私用にて出でたり。私に人を罵ること、  
士たるものの本意にたがへり。たゞ堪忍だにせば、世に耻辱  
といふこともあるべからず。」といはれきとぞ。——雲萍雜志——

打擲

いふがひな  
きこと



(一)支那晋代の博學者で、繪が非常に上手であつた。

佳境

(二)支那唐の太宗の臣房玄齡等が勅命によつて作つた晋の歴史。

訓す

## 二 漸進主義

八波 則吉

昔(一)顧愷之といふ人は、甘蔗を食ふ毎に、常に尾から本に至るのでした。或人がその理由を問ふと、愷之は「漸く佳境に入る。」と答へたと、晋書(二)といふ書に見えてゐます。私のここにいふ漸進主義とは、即ちこの漸入佳境主義のことです。「漸」の一字、これ私が平素最も愛する文字です。「や、や、や」や、「やうやう、やうやく」などと訓じまして、次第次第の義です。急の反對です。一步一步の意味です。一足飛ではなくて、一足づゝの意味です。漸進、漸進。これ私が平素最も愛する主義です。

(一)明治四十一年(戊申)十月十三日發布。

自彊息まず

(二)今から四千年餘前支那の周といふ時代の初頃にできたうらなひの書。

軌道

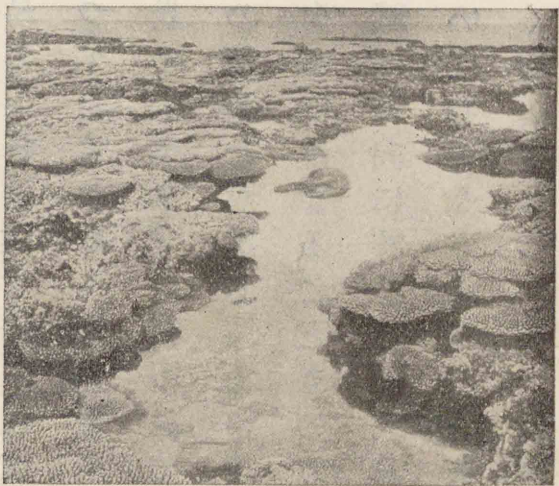
千古不易

戊申詔書の中に、「自彊息マサルヘシ。」とあります。それは周易の「天行は健、君子は以て自ら彊めて息まず。」と同義だと承つてゐます。即ち日月星辰の運行は、幾萬年の往古から幾億歳の未來まで、自彊不息です。しかも一定の速度を以て、一定の軌道を漸進してゐるのです。御覽なさい、太陽は旦に出て夕べに没すること、きのふもけふも同様です。千古不易です。試に日向に棒を立てて日影の推移を熟視すると、少しも動いてゐるやうには見えませんが、暫時油斷してゐる間に、驚くばかり移つてゐます。東北地方で、農夫が夏時田の畔や草原に寝てゐるが、竿に蓑笠を吊して枕元に立てながら、身はその蔭を離れる尺餘の炎天下に熟睡してゐるのを往々見



分泌す

(一) 二千年三百年ほど前に支那の列強といふ人の著した書



珊瑚礁

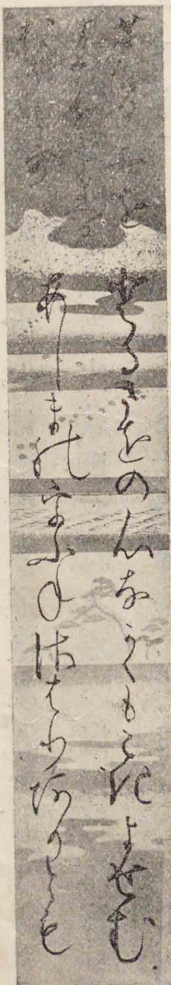
受けると、或旅行記に記してありましたが、よく天行の健を示すと同時に、君子ではないものの自強不息實行難を物語つてゐるではありませんか。南洋にある珊瑚礁は、珊瑚蟲と稱する微細な蟲の分泌する石灰質の堆積ださうです。蟻の塔や蜜蜂の蜜などを見る毎に、私は自強息まない漸進主義の効果の大きいのに驚かないではられません。

昔愚公が山を移したといふ話が、<sup>(一)</sup>列子といふ書に出てゐる

(一) 徳川時代の儒者室鳩巢(享保十九年一七三四年一二月七)の著書

人口に膾炙す

て、<sup>(一)</sup>駿臺雜話にも引いてあります。また鐵の杵を磨いて針を造るものを見て學に志した人の話は、よく人口に膾炙してゐます。いづれも根氣よく辛抱すべきことを諭した自強不息の實例で、取りも直さず漸進主義の効果を語つてゐるのであります。



昭憲 皇太后 御筆

明治天皇の御製の中の、

〇いちはやく進まんよりも怠るな  
まなびの道にたてるわらははべ



古今和歌集。普通略して古今集といつてある。延喜五年四月十八日。紀友則、凡河内躬恒、壬生忠岑、恒之、四人が醍醐天皇の勅を奉じて撰した和歌集。塵ひぢ

とる棹の心長くも漕ぎよせん  
蘆間の小舟さはりありとも  
大空にそびえて見ゆる高嶺にも  
のぼればのぼる道はありけり  
など、いづれも漸進主義、即ち息まない自彊の偉績を教へ給うたものかと拜察します。古今集の序に、  
「遠きところも出立つ足もとより始りて、年月をわたり、高き山も麓の塵ひぢより成りて、天雲たなびくまでおひのぼれる如くに……」  
とあるのも、古歌に、  
① 怠らず行かば千里のはても見ん

書取

鼓吹す

(一) 東京府荏原郡大森町。東京灣に面する。  
めでたし  
まだき  
(二) 荏原郡大井町。大森町の東南約一里。  
(三) 今大井町の中町の東端。  
踏みしだく  
(四) 荏原郡入新井町の中。鈴ヶ森の西南十數町。

うしの歩みのよしおそくとも  
とあるのも、また我が漸進主義を説明し鼓吹したものと見れば見られます。  
——よくぞ男に——

二二三 田園の夏

杉村廣太郎

家を大森の片ほとりに移してよりここに一年、四季毎に變り行く鄙の趣、中にも夏ばかりめでたきはなし。  
朝はまだきに起出づ。風涼しく氣清ければ、自轉車にうち乗りて、大井、鈴ヶ森の邊を走る。行人稀にして、舞ひのぼる塵もなし。曉風身にしみて、夏の半ばなるを覺えず。日麗かなる時は露けき野原踏みしだきて、行きて潮を八幡の濱に浴ぶ。



海づら

朝は水澄めれば、底の眞砂も數へつべし。鏡の如き海づら、彼方此方泳ぎまはりて汀に歸れば、水樓、人晏くして、雨戸繰る音始めて聞ゆ。

膳羞

歸りて朝食した、むるに、必ずしも膳羞を須ひず。紫深き茄子の淺漬に、番茶の煮ばな香いと高し。食卓を圍むもの、母と妻と、二兒と、伊豆より來れる少婢と、これに某生と我とを加へて、合はせて七人なり。某生は夏季休業中來りて、我が家に宿れるなり。

時餘りあれば更に冷水に浴し、さては素跣足にて裏の瓜畑に水を注ぐ。さるべき暇なき時は白麻の衣軽く着なして、直ちに東京に向かふ。八時十三分の發車を待合はする人々、

Platform.  
(步履)  
目禮す

をかし

大森停車場のプラットホームに賑はし。知る、知らぬ、互に目禮して、昨夜は暑かりしなど語り合ふ。さすがに都離れたるさまをかし。

晝少し過ぎて家に歸る。さと水を浴びて後、午餐の膳につく。清風徐に來る所庭の櫺の影濃やかなる所、遙かに沖なる白帆の行交ふを眺めて、いつとはなく夢に入る。覺めて後、日なほ高ければ、某生を促して海に入り、或は潮を浴び、或は貝を拾ふ。さては射的場の裏なる松林に入り、蟬聲雨の如きを聞きつゝ、休らふ。

蟬聲雨の如し

偶、都より友の訪ひくるあれば、舟を傭うて灣内を漕ぎ、疲れて握飯を頬ばり、澁茶に喉を潤ほす。その快いかばかりぞ



嬉し

嬉し  
嬉し  
嬉し

二度の  
打羽ばえ

のまじり

張る

山登り  
嬉し  
こがらふ

や。歸りて拾へる貝の汁を調へてもてなす。旨しとも旨し。朝のうちに來べき八百屋の來ぬをりは、裏の手作の芋を煮て客に饗すべし。

家の裏に十歩の空地あり。夏至る毎に、自然薯の蔓生ひて櫻の枝にわたり、楓の幹にかゝる。天僅かに曇りて暑さ稍輕き時は某生と共に赤裸々となりてこれを掘る。掘り掘りて手も届きかぬるに至れば、大地に横たはりて、半ば頭を穴に埋めて掘進む。二尺許なるもの二つを得れば、以て一家の食膳を満たすべし。乃ち泥まみれのまゝ、海に出でて洗ひ來る。歸れば薯汁すでに成りて、我を待てり。

水を家の内外に撒き、一浴して都の塵と垢と汗とを洗ひ

たる後、夕餐の膳につく。朝餐に列なれる人の一人も缺けず、一日の務を終へて集りたる、嬉しからずとせず。

日暮れなんとするに、風益、冷しく、氣愈、涼し。東の障子明放ちたる所より見おろせば、青々たる稻田のあなた、暮行く鈴ヶ森、八幡の濱の家々を隔てて、白帆漸く消え、漁火次第に鮮かなり。幼きものは少婢に伴なはれて、畔道にさまよひ出でぬ。母と妻とは八雲琴などおぼつかないげに搔鳴らす。我は庭の大樹にハンモック懸渡して、のけざまに臥しつゝ、縁に出でたる某生と語る。仰ぎ見れば星光愈、明らかに、樹梢を戦ぎわたる風殊に涼し。垣を隔てて行交ふ村人の取繕はぬざれ言、手に取る如く聞ゆ。

Hammock

ざれ言



夜更けぬれば、人聲次第に疎なり。時には神明の森のあたりを掠めて杜鵑の啼くを聞く。臥床に入りやせまし、入らずやあらましなどうち案じつゝ、書を読むに、燈火を慕うて飛びくる蟲の數々、一に蛾、二に金龜子、三に蟬、四に蜻蛉、その外は名をだに知らず。

月出でたる、またなく嬉し。光きらきらと水に映りて、水際の松林を離れ行くさまのをかしきに、竊に門を開きてあこがれ出づれば、同じ思の人のありてや、月下に横笛を吹きすさぶ音など聞ゆ。

——へちまの皮——

一一三 夕立

徳富健次郎

あこがれ出  
づ  
吹きすさぶ

けふ早めに夕飯を食べて庭に出てゐると、北からひいやりと風が來た。眼を上げると、果して果して、北に一團紺青色の雲が立つてゐる。その紺青の雲を背にして、こんもりとした隣家の杉や、檜の木立、孟宗竹の藪などが、いづれも生々しい緑を浮かしてゐる。

「夕立がくるぞ。」

主人は大聲に呼んで、手早く庭の干物、履物などを片づける。裏庭では、婢が驅けて來て、洗濯物を取入れた。

やがて食卓から立つて妻子がおりて來た頃には、北天の一隅に埋伏してゐた、かの濃い紺青色の雲が、忽ちにむらむらと湧起つて、何の艶もない濁つた煙色に成り、見る見る天

天穹



天心

穹をはひ上り、大軍の散開するやうに、東に、西に、天心に、ずんずんと擴つて來た。三人は芝生に立つて、驚嘆の眼を見はつて、この夥しい雨雲の活動を見た。

(一)ヨハネ黙示録  
キリスト教經  
典の新約聖書  
中の一節

あな夥しの雲の勢や、黙示録に「天は卷物を卷くが如く去行く。」と歌つたも無理はない。青空は今南の一軸に卷きぢまめられ、煤煙の色をした雲の大軍は、その青空をすら餘さじものをと、南を指してひた押しに押寄せてゐる。つい今しがたまで雨をこひしがつてゐた乾ききつた眞夏の喘は、どこへ行つたか、たゞ十分か十五分のうちに、大地は恐しい雨雲の下に閉ぢこめられて、冷たい暗い冥府になつた。雲の運動は秒一秒劇しくなつた。南を指して流れる雲、渦

冥府

ひた押し  
眞夏の喘

卷く雲、眞黒に屯つて動かぬ雲、雲の中から生まれる雲、雲を摩つて移り行く雲、濃くなり淡くなり、淡くなり濃くなり、北から東へ、東から西へ、北から西へ、西から南へ、逆流して南から東へ、世界中の煙をここに集めて、煤煙の限りなく湧くやうに、眼を驚かす雲の大行軍の音響を聞かぬが不思議である。

冷たい風がすうつすうつと顔に當る。後馳に雷がそろそろ鳴りだした。北の方で、條（まじり）をなさぬ紅や紫の電光が、時にはつぱつと天の半壁を照らして閃く。近づく雷雨を感じつゝ、我等はなほ頭上の雲から眼を離し得なかつた。薄汚い煤煙色をした満天の雲は、益、南へ流れた、水のやうに、霧のやうに、

天の半壁を  
照らす



煙のやうに。空は皆動いてゐる。濶い空はどの一寸四方として、動いてゐないのはない。草木も人も息を屏めたかのやうに、一切の物音ははたと絶えた。



雷 雨 (大智勝觀筆)

がて粒だつた雨になる。雷も頭上近くなつた。母屋の南面の雨戸だけ残して、悉く戸を締めた。暗いのでランプをつけた。

空はとうとう  
雲をかぶつてし  
まつた。著しく水  
氣を含んだ北風  
がばつばつと顔  
をうつて來た。や

雨脚

ざあつと降りだした。雷が鳴る。一庭の雨脚を凄じく見せて、ぴかりと電が光る。颯々と烈しく降りだした。

見る見る庭は川になる。雨が飛石をうつて跳反る。目に入る限りの青葉が、一葉、一葉に雨を浴びて、嬉しさうにぞくぞく身を震はしてゐる。

「あゝ、好いおしめりだ。」

と誰かがいふ。

「まだ七時だよ、まあ。」

妻と婢との驚いた聲がする。

夕立から本降りになつて、雨は夜すがら降つた。

—みゝずのたはこと—



(一) 東京市の西に隣接する代々幡町の大字。

### 二四 月見草

水野葉舟

或日、晩の食事が済んだあとで、私は友だちと二人で代々幡町の原を歩いてゐました。

夏の黄昏の光線は、實に美しく、爽かなものです。緑の木の葉は晝の間とまるで違つた光を含んで來ます。自分の中からも光が溢れて出てくるやうです。柔かな緑の湯氣が立ちこめるやうです。空氣の中には微かな心持のいいしめりが籠つて來て、それが身體を包んで、しつとりして來ます。この柔かい光としめりとの中を歩いて行きながら、私たちは靜かな聲で話をしてゐました。

をどむ



(筆畝紅田中) 草見月

ら開く夏の夜の  
花が、もう咲きだ  
さうとして、ふく  
らみ始めるので  
す。

黄昏の薄明がだんだん暗くなつて、灰色がかつて來ます。いろいろな色が黄、赤、緑、紫、その他にもいくつかの色が溶けこんでゐる、不思議なほど複雑な灰色です。その中で、黄昏から開く夏の夜の  
花が、もう咲きださうとして、ふくらみ始めるのです。



を吐出すやうに、ごく微かな水蒸氣で、蔭にまつはられ、隈どられて、その茂みの中に暗いものが籠つて來ます。

空の上の方には、まだ透通つた日の光が、いくら残つてゐます。その中で星が黄金の輝きで鮮かにきらめいて、光り始めてゐます。

私たちは暗い林のわきを通つてもとは澤地だつたらうと思はれる窪みについた道を下りて行きました。その先は、西南に向かつて展けた廣い畑地に續いてゐる草原です。少しばかり櫟くわす、樅ぼらの雜木があつて、その下草が茂つてゐました。まだはつきり人の顔が見えると思はれるくらゐの明るさの中で、私は黄色い花を見ました。殆ど混り氣のないと思

はれるくらゐの柔かい黄色です。私は立止つてしまひました。そしてつれの人の顔を見ました。

腑に落ちる

「月見草ですね」と、その友だちは平氣な聲でいひました。「黙つて……」といふやうに、思はず私は目でその人の言葉をおさへました。この時私は妙に敬虔な心持になつて、靜かにその花のそばに寄つて行つたのです。友だちはそこに立つたまゝ、腑に落ちないといふ様子で、私を見てゐます。

私の様子は、よそから見たら、をかしかつたかも知れません。しかし自分では、非常に強い緊張した心持になつてゐるのです。

「何といふ靜かで強い美しさだらう。この野の中から、この



花のまはりの一坪だけをきり取つて見て……それだけで、私たちは人間の言葉でいひつくすことのできない、實に立派な自然の魂を見る。」と、私は思つてゐるのでした。

そこに茂り重つてゐるいろいろな雑草の葉の形は、互に入亂れて、その緑が黒ずんで沈んでゐます。今ここで見えるのは、一つ一つのものの形よりも、その全體の色です。暗い緑の色は、盛上つて茂つた盛な力で、じつと動かないのです。その草の中を二尺許もぬいて、一本、月見草の花をつけた莖が眞直に立つてゐます。この叢の中に、月見草はたつた一本あつたのです。その莖に三つ柔かく廣い瓣の花が開いてゐます。

その花の色が月の光のやうにぼつとした黄色で、薄く隈をとつて明るくなつてゐるやうです。暖かな柔かみのある明るさが、この草の暗い緑の上を照らしてゐるのです。もうごく微かになつてゐる空の上の光を鋭く感じて、それをこの闇の底から反射させてゐるのです。それに自分のからだの中から、光が溢れ出て來てゐるのです。水をたつぷり含んだ細胞の粒が、はり切つてふくらんで行くので、柔かな暖かい光が溢れてゐるのです。

私は莊嚴なものを見る氣がしました。そのそばに寄つて行つて見ると、も一つ四つ目の花が後れて今開かうとするところでした。花瓣を包んでゐる鞘のやうな形の萼が、もと



肉眼

の方から裂けて、その裂目から純黄な花瓣がふくらみだしてゐるところです。

私はその花瓣がすつかり開いてしまふまで見てゐようと思つてゐました。きつと眼でその花瓣がふくらんで伸びるのが見えると思つたからでした。花はもう一刻も休まずにふくらんで行くのです。しかし、人間の肉眼は、それをはつきり見る事ができないのです。私はいつまでも同じものを見てゐる氣がしました。

そのうちに友だちが呼びました。振返つて、ほんの三十秒もかゝつて二言三言話をして、また花を見ると、もう蔓はすつかり裂けて、その尖端の所だけがついてゐました。花瓣は

その中からはみ出して、今までにだんだん蔓を裂いて來た力を見せてゐます。と、ごく軽い風が來て、その花を揺つたはずみに、蔓はすつかり裂けて、ぱつと重い圓い花瓣が開きました。そして深い喜ばしい吐息をしたやうでした。

追懷

畫 顔〔自修文〕

吉村冬彦

いくつくらゐの時であつたか、確かには覺えぬが、自分が小さい時のことである。宅の前を流れてゐる濁つた堀川に沿うて、半町くらゐ上ると、川は左に折れて、舊城の裾の茂みに分入る。その城に向かつた此方の岸に、廣い空地があつた。維新前には藩の訓練場であつたのが、その頃は縣廳の所屬になつたまゝで、荒地になつてゐた。近邊の子供はここを好い遊び場所にして、柵の破れから出入し

(一) 理學博士。本名寺田寅彦。東京帝國大學教授。高知縣の人。

訓練場。むかしの練兵場の稱。



宵闇  
夕方のうすく  
らい時ゆふ  
やみともいふ。

言知らぬ  
何ともいへぬ。  
宵の口  
日のくれぎは。

てゐたが、咎めるものもなかつた。夏の夕方は、めいめいに長い竹竿を肩にして、空地へ出かける。どこからともなく、澤山の蝙蝠が蚊を食ひに出て、空を低く飛交はすのを、竹竿を振つてはたき落すのである。

風のない烟つたやうな宵闇に、蝙蝠を呼ぶ聲が對岸の城の石垣に反響して、暗い川上に消えて行く。蝙蝠來い。水飲ましよ。そつちの水にがいぞ。」とあちらこちらに聲がして、時々竹竿の空を切る力ない音が、ひゆうと鳴つてゐる。賑やかなやうで、言知らぬ寂しさが籠つてゐる。蝙蝠の出盛るのは宵の口で、遅くなるに随つて、一つ減り、二つ減り、どこともなく消えるやうにゐなくなつてしまふ。すると子供等もちりぢりに歸つて行く。後はしんとして、死んだやうな空氣が廣場を鎖してしまふのである。いつかねぐらに迷うた蝙蝠を追つて、荒地の隅まで行つたが、ふと氣が付いて見ると、あたりには誰も居らぬ仲間も歸つたか聲もせぬ。川向ふを見ると、城の石垣の

鬱然  
木のこんもり  
と茂つたさま。  
鬱葱ともいふ。  
汀  
水と地との接  
したところ。  
名狀の、できぬ  
ことのできな  
い。いひあらはす

力草  
つかまつた  
よりにする草。

上に鬱然と茂つた榎が、闇の空にも恐しく擴つて、汀の茂みは眞黒に眠つてゐる。足を舉げると、草の露がひやりとする。名狀のできぬ暗い恐しい感じに襲はれて、夢中に驅出して歸つて來たこともあつた。

廣場の片隅に高く小砂を盛上げた土堤のやうなものがあつた。自分等はこれを天文臺と名づけてゐたが、實は昔の射的場の玉避けの迹であつたので、時々砂の中から長い鉛玉を掘出すことがあつた。年上の子供はこの砂山に攀登つては滑り落ちる。時々戦争ごつこともやつた賊軍が天文臺の上に軍旗を守つてゐると、官軍が攻登る。自分もこの軍勢の中に加るのであつたが、どうしてもこの砂山の頂まで登ることができなかつた。いつもよく自分をいぢめた年上の者等は、苦もなく驅上つて、上から弱蟲と嘲る。早く登つて來い。ここから東京が見えるよ。などといつて笑つた。悔しいので懸命に登りかけると、砂は足元から崩れ、力草と頼む晝顔は脆くちぎれ



胸に巢をくふ  
る。胸に深くやど

執着  
深く思ひこん  
であきらめら  
れないこと。

(一)吉村冬彦の隨  
筆集。東京春  
陽堂發行

て、滑り落ちる。砂山の上から賊軍が手を拍つて笑つた。しかし、どう  
しても登りたいといふ一念は、幼い胸に巢をくつた。或時は夢にこ  
の天文臺に登りかけて、どうしても登れず、もがいて泣き、母に起さ  
れ、蒲團の上に坐つてまた泣いたことさへあつた。「お前はまた小さ  
いから登れないが、今に大きくなつたら登れますよ。」と母が慰めて  
くれた。

その後、自分の一家は國を離れて都へ出た。執着のない子供心に  
は、故郷のことは次第に消えて、晝顔の咲く天文臺もたゞ夢のやう  
な影を留めるばかりであつた。二十年後の今日、故郷に歸つて見る  
と、この廣場には町の小學校が立派に立つてゐる。大きくなつたら  
登れると思つた天文臺の砂山は取崩されて、もう影も形もないた  
だ昔のまゝを留めて懐かしいのは、放課後の庭に遊んでゐる子供  
等の勇ましさ、柵の根本に枯れ枯れに咲いた晝顔の花とである。

(一)吉村冬彦の隨  
筆集。東京春  
陽堂發行

(一)山口縣(長門  
國)開港場。門  
海を隔てて。門  
司に對する。門  
また馬關とも  
いふ。

(二)神奈川県(武  
藏國)開港場  
東京の西南約  
八里。

二五 旅人となりて

吉田絃二郎

今朝八時半の特急で、下關まで一氣に走ることになりました。  
避暑の客や何かでこみ合ふことだらうと思つてゐまし  
たが、さほどでもなかつたので、大助りでした。

東京を立つ時には珍しく細雨を見ましたが、横濱あたり  
からすつかり晴れて、またもとの蒸暑い天氣になりました。  
青い山、青い畑が鐵道線路を挟んで迫つてくると、谿間に  
も、野の面にも、白百合がちらほらと見えます。葛の花や朝顔  
が、畑にも、家のまはりにも咲いてゐます。空も、山も、流も、光に  
輝いてゐます。



(一)共に神奈川県相模國足柄下郡  
(二)箱根、足柄の両道の中間  
(三)駿河津ともいふ

青嵐

眼を閉ぢて車のきしる音を聴きます。汽車はひたすらに光の野を西へ走ります。  
國府津(一)に着いて始めて海らしい海を見、山らしい山を見ることのできたのは、嬉しいことです。箱根(二)や乙女峠(三)には雲が懸つてゐます。

箱根に入つて、さすがに高原らしい涼しさを覺えました。文字通りに青い毛氈を敷いたやうな裾野には、明方の星をばらまいたやうに、白い百合が咲きこぼれてゐます。線路に沿うた圓い柔かな線を描いた丘には、離々たる青草の上に、盛上げられたやうにして白百合が咲いてゐます。合歡な木の花も、石竹も、をみなへしも、一樣に青嵐と芳草とのうちに七

清冽

月の光を浴びてゐます。

川は瘦せてゐます。白い礫の上を滑る清冽な水は、青い山の裾を縫うては、青い嵐のなか

深潭



夏 草 (黒田清禪筆)

に隠れて行きます。蓑を被て深潭に釣を垂れてゐる男もあります。高原を走る汽車を見おろして、更に高い山道を歩いてゐる少年の群もあります。乙女峠には雨が降つてゐます。

「富士山は見えますか。」

私は突然隣の男に沈黙を破られました。その男は始めて



日本を旅行する臺灣人でありました。富士は雲に鎖されて見えませんでした。私はこの旅人に對して氣の毒に思ひました。私は微かに雲霧の間にほの見えてゐる富士の稜線をたどつて、その男に富士の形を説明しました。

(一) 靜岡縣(伊豆國) 田方郡

時雨

汽車は裾野を三島の方へ走つてゐます。時々横なぐりに時雨のやうに寂しい雨が降つて來ます。斜に打附けられた雨の脚がまだ乾ききらぬ間に、正午の太陽が焼くやうに硝子窓を射ます。けれども、高原の風は青く薫つてゐます。禁喫煙の禁を犯して煙草をふかしてゐる男もあります。けれどもここでは、それを憎む氣にはなれません。薫風と青嵐との間に包まれた人間の集合は、自然が生んだ可憐な嬰兒の遊

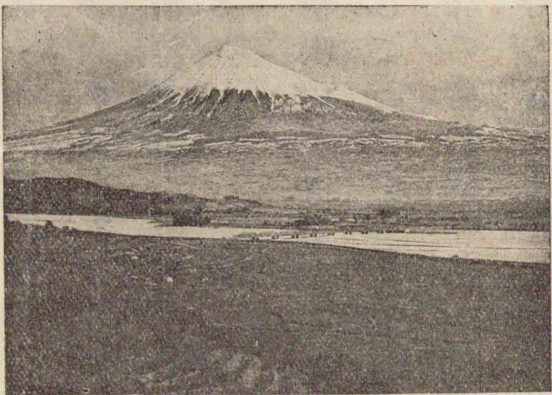
薫風

可憐な嬰兒

戯に過ぎません。彼等の行爲はすべてさながらのもの、善きものとして受容られることができるやうに思はれます。

私は幾たびか小さい行李の底から本を取出しました。けれども、私はすぐ本を捨てました。どうしてこの偉大な自然から私の眼を離すことができません。

桑の畑、芋の畑、黍の畑を隔てて、汽車は富士を中心に大きな圓を描いて走つてゐます。黍の赭い穂の上に雲の峰が懸り、四十雀の唄が聞えてゐます。



富士の裾野



抒情詩

(一)滋賀縣。琵琶湖の東北。近江と美濃との國境。  
 (二)岐阜縣(美濃國)。慶長五年石田三成等の徳川家康と戦つた所。  
 (三)滋賀縣。米原の東北一里餘。  
 (四)「夏草やつはものどもが夢のあと。」

馬洗ふ里の子供たちの上に煙を残しつゝ、汽車は鐵橋を渡つてゐます。うとうとと眠つてゐた眼に、紅い蓮の花の咲いた田が長く長く續いてゐるのが映ります。淡い薫が夢を誘ふやうに窓を襲うて來ます。一羽の白い鳥が紅い花の上を靜かに翔んで行くのが、靜かな抒情詩を讀んでゐるやうな心持を喚びおこします。

おひおひ太陽が陰つて行きます。伊吹山の白く頽れた傾斜面が、午後の太陽をまともに反射してゐます。

(二)關原や醒井などいふ聯想の多い驛の名が續きます。芭蕉の夏草の句を想はせるほど、山も平野も青々としてゐます。この附近から西は野の百合が紅くなります。

水郷

(一)滋賀縣。京都府(山城國)に跨がる。海抜八五〇米。  
 (二)瀬多川。琵琶湖から出、宇治川と稱せられ、下流は淀川に注いで大阪灣に注いでゐる。



(筆舟曼村川) 叡 比

を深くさせます。

(一)比叡の峰は曇つてゐます。黒い雲を破つて眞紅な夕焼が湖面を壓するやうに燃えてゐます。瀬多の流に群をなして

湖水に沿うた村々の家の白い壁には、力ない夕陽の影が動いてゐます。田や畑の隅々に小さい木立があつて、そこには青い竹で作られたはねつるべが掛つてゐます。若い女たち

ちが二三人づつで、耕作物に井戸の水を撒いてゐます。二段にも三段にも水車を掛けて、湖の水をかい出してゐるのも、水郷の感じ



(一)滋賀縣と京都府との境

白い鳥が眠つてゐます。  
逢坂山のトンネルを越えると、大きな角の牛がのそのそと荷車を曳いて、近江の方へ歩いてゐます。黄昏は牛の背に落ちかゝつてゐます。

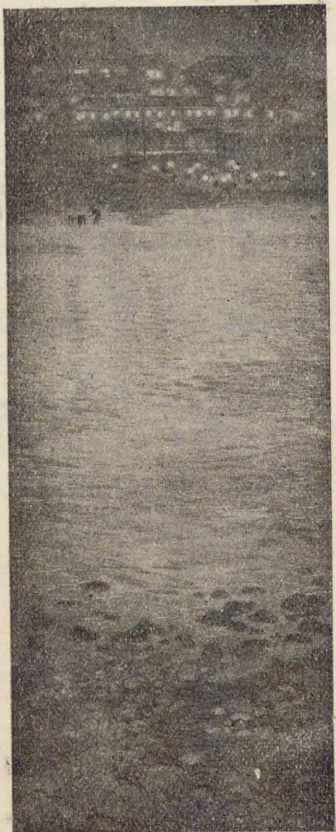


(筆紅紫村今) 多 瀬

(二)京都市の東部を流れてゐる

日はとつぷり暮れました。紅い提燈の灯が闇の中に幾段にも幾段にも重つて、流に沿うて映つてゐます。  
「(二)賀茂川の灯。」

人々は窓をあけて、闇の底に紅い灯を見出してゐます。長いプラットホームに下駄の音が響きます。思ひなしか、下駄の音までゆつたりと聞えます。



(筆江參本川) 灯の川 賀茂

人々は大  
方出て行つ  
てしまひま  
した。新聞紙  
や折などの  
散らかつた薄暗い室のなかに、私はまたこれから先の二百里餘りの旅路を想つてゐます。  
さすがに旅らしい寂しさがどことなく漂うてゐます。



二六 ふるさと

石川啄木

ふるさとの

かの路傍の棄石よ、

今年も草に埋れしならん。

ふと思ふ、

ふるさとにゐて日ごと聞きし雀の鳴くを、

三年聞かざり。

それとなく

郷里のことなど語り出て、

秋の夜に焼く餅のほひかな。

馬鈴薯の薄紫の花に降る

雨を思へり、

都の雨に。

汽車の窓、

はるか北にふるさとの山見え来れば、

襟を正すも。

ふるさとの山にむかひて

いふことなし。

ふるさとの山はありがたきかな。

—啄木全集—



いとほしむ

有徳  
無能

二七 座右の銘

中根 東里

- 一、父母をいとほしむ、兄弟に睦ましくするは、身を修むる本なり。本かたければ末しげし。
- 一、老を敬ひ、幼を愛しみ、有徳を貴び、無能をあはれむ。
- 一、忠臣は國あることを知りて、家あることを知らず。孝子は親あることを知りて、己あることを知らず。
- 一、祖先の祭を慎み、子孫の教を忽にせず。
- 一、辭はゆるくして誠ならんことを願ひ、行は敏くして厚からんことを欲す。
- 一、善を見ては法とし、不善を見ては誠とす。

他山の石

- 一、怒に難を思へば悔に至らず。欲に義を思へば耻をとらず。
- 一、儉より奢に移ることは易く、奢より儉に入ることは難し。
- 一、樵夫は山に登り、漁夫は海に浮かぶ。人各その業を楽しむべし。
- 一、人の過をいはず。我が功に誇らず。
- 一、病は口より入るもの多し。禍は口より出づるもの少からず。
- 一、施して報を願はず。受けて恩を忘れず。
- 一、他山の石は玉を磨くべし。憂患のことは心を磨くべし。



一、水を飲んで楽しむものあり。錦を衣て憂ふるものあり。  
 一、出づる月を待つべし。散る花を追ふこと勿れ。  
 一、忠言は耳に逆ひ、良薬は口に苦し。  
 — 東里外集 —

二八 猫の名

平 雅 翰

不肖 見識  
 なま好事  
 至らぬさた

人は賢不肖ともに自己の見識はありたきものなり。昔さるなま好事のものあり。或時鼠を防がんため猫を飼ひぬ。毛色黄ばみ、形大にして猛々しく、さながら描きし虎に似たれば、とらと名づけて寵愛せり。友人來りてその故を問ふ。答ふるにその意を以てす。その人いへるやう、それはまた至らぬさたなり。虎より強きものあり。世に龍虎といへれば、龍こそ

優れるならぬ。といふ。さらばその意に隨はんとて、龍と名づけぬ。さる人來りて、それも至らぬなり。龍をのせて空を走るは雲なり。といへば、また雲を吹散らすは風なり。風こそよろしからん。といひつる人のあるまゝに、風と名づけ置きたりしに、また人ありて、何ほど烈しくとも、吹破ることのかなはぬは壁ならん。といへるほどに、愈、惑ひて、いかが名づけてよからんと、あたりの人に問ひければ、壁も呼びにくからん。壁に穴を穿つものは鼠なり。それを捕ふるものは猫ならん。といはれ、始めて心づきしといふ。これ己に見識なき故、ここに問ひ、かしこに尋ねて、愈、惑へるなり。餘り好事もいらぬものなり。

— とはすがたり —



西課  
元課  
考由あり  
元課は  
書取  
西課  
元課  
意味

二九 明治天皇の御遺物を拜す その一

笠井 信一

(一)大正二年一月

権殿

(二)明治天皇

靈感

(一)先月十七日、宮中より地方長官一同に午餐を賜ふ旨仰せ出されましたので、定時に参内いたしましたところが、十一時過権殿参拜を許されました。権殿と申すは、崩御の後一年間皇靈を祭らせられる宮中の御室でございます。即ち私どもはこのたび、先帝の皇靈を拜する特別な御恩典にあづかつたのでございます。そこで、私どもは長い廣い御廊下に整列いたしましたして、宮殿奥深く権殿に詣つて、一人づつ最敬禮をいたしました。蓋しその瞬間は、何人と雖も一種の靈感に

打たれないものはなかつたのでございませう。その権殿と申すは、平素皇后陛下の謁見所たる桐の間を以て、これに充てさせられたのでございました。

それから更に奥殿に進みまして、御學問所を拜観いたしました。御學問所は表御座所とも申し上げ、萬機の政を御親裁あそばされる所でございます。先帝には永くここに在らせられて、徳教をお布きになり、大憲をお定めになり、或は國交をお修めあそばされ、時に或は膺懲の師を起させられるなど、宏謨雄圖一にこの中でお定めあそばされたのでございます。然らばどんなに御立派な御部屋かと申すに、實に意外なこと、平常私どもが参内の節、休息を許される御部屋

徳教を布く  
膺懲の師  
宏謨  
雄圖



瀟洒

の方が却つて遙かに御立派である。しかも餘り廣くない二  
 間續の御部屋であつて、瀟洒たる檜の白木造ではあるが、別  
 段これと申す御裝飾もあそばさ  
 明れてない。御机も御椅子も、實に御  
 治質素なもので、絨毯じゅうたんの如きは、當初  
 天敷かれたまゝのもの故、後には色  
 皇も大分さめて参りましたので、侍  
 臣からお取替を屢、願ひ出ました  
 が、お許がなくて、遂に今日に至つたのださうでございます。  
 御部屋は三方壁を以て繞らし、南の一方に硝子戸があり、  
 御机は御座所の中央に、南向にお据ゑになつてあります。こ



の御構造を拜観すると同時に、夏分はさぞお暑いことので  
 らせられたらうと感じましたが、先帝にはお暑さのお厭も  
 なく、連日ここに出御あらせられたのでございます。これに  
 ついても、

年々に思ひやれども山水を

くみて遊ばん夏なかりけり

の御製を想ひ起して、誠に恐懼に堪へませんでした。それの  
 みならず、この御部屋にはストーブ(1)の御設がございますけ  
 れども、三十七年の冬以來、お用ひがない。竊かに承るに、その  
 年の冬の或朝、例の如くストーブに火が焚いてございまし  
 たが、先帝が出御あそばさずや否や、「火を消せ」と仰せられる。侍

す 恐懼に堪へ

(1) Stove  
(暖爐)

(2) 明治三十七年。



賤が伏屋  
貧乏の人の  
家

斯民

大御心  
皇軍

従は何故かわかりませんが、たゞ仰のまゝに火を消しまし  
た。さてその後と申すものは、いかなる酷寒と雖も、一切スト  
ーブの御使用をお許しあそばされなかつたとのことでご  
ざいます。これは勿論大御心のほどを窺ひ奉るわけにはま  
りませんが、侍従方の推測し奉るところでは、當時皇軍が  
満洲の野に大敵と戦ひ、飢寒に苦しんで居るのに御同情を  
垂れさせられ、兵士と艱難を共にせんとの御仁心に出でさ  
せられた次第であらうと申すことをございます。それ以來  
は、たゞ一個の小さい丸火鉢のみを御使用あそばされたと  
の御事。今その御火鉢を拜観するにつけても、思ひ出される  
のは、斯民の上を思ひやらせられた御製、

賤が伏屋

一面観

(大正天皇)

桐火桶かきなでながら思ふかな  
すきまおほかる賤が伏屋を  
でございます。

三〇 明治天皇の御遺物を拜す その二

この御部屋の拜観が終つて、更に別室の拜観を許されま  
した。この御部屋には、先帝の御學問所で御使用になつた御  
遺物全部、そのまゝに据置かれてございます。これは今上天  
皇陛下の大御心に出でさせられた趣に拜承いたしました。  
構造も、方向も、廣さも、御學問所と全く同一であつて、すべて  
の御遺物も、昨年七月十三日、即ち先帝最後の御出御當時のま



仔細に

まに、お備附になつてございました。床の間にはその當時の御軸物が掛けてあり、その前方には、御劔が數振横たはり、御机は中央に南面してございます。先帝御在世のをりは、我等如きものが御机に接近するなどは、思ひも寄らぬことでございますが、今回は特にお許を蒙つて、仔細に拜觀する光榮を得ました。

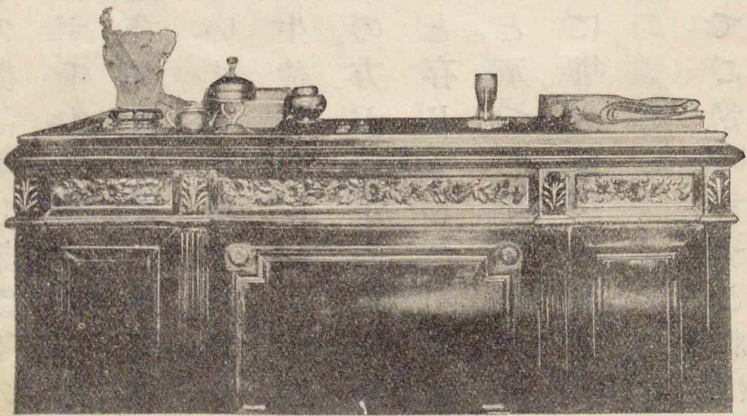
(Table  
(卓)

まづ御机は羅紗を鏡張にした<sup>(1)</sup>テーブルで、中ほどに焼痕がございます。これは先帝が御煙草を召上つていらせられた節、臣下より政務を言上いたしましたところ、先帝にはお吸ひかけの御煙草をテーブルの上の或物に横たへて、御熱心に御聽取あらせられたをり、煙草が落ちて、この焼痕がつ

修理  
儉徳の至

いたのだと申すこととでございます。さてこの焼痕のあるテーブルの羅紗をお取替へ申し上げんが爲、侍臣より幾たびか願ひ出でましたけれども、斷じてお許がなかつたとの御事。蓋し何物でもそれにて事足る以上は、修理さへお控へあそばされる御儉徳の至と拜察し奉ります。

御硯箱は、明治二十年に鹿兒島縣からお取寄せになつた竹製の



御常用机



品でございます。その中の筆は普通の御品で、我等臣下の日常用ひるものと變らないのみならず、毛尖は禿<sup>かぶ</sup>び、軸の文字は見えないほどにお使ひふるしになり、墨もまた同様で、一寸くらゐに磨減らされた品もございました。鈇も同じく普通市場にある御品で、その傍に、學校生徒等の用ひる普通のインキがございました。最初は、侍従の方が何かの調に用ひたまふ、そこに置忘れたのであらうと存じましたが、やはり先帝の日常お用ひになつたものだと思つて、今更ながら御儉徳の高きに感激し、自ら願て慙愧に堪へなかつた次第でございます。

御椅子の下に獅子の毛皮が敷いてございます。これは赤

〔Ink〕

慙愧に堪へず

坂假皇居においであそばされた頃から、長く御使用になつたもので、毛も次第に磨切れ、皮も遂に破れるやうになりました。そこでお取替を願ひ出でましたが、なに、宜しい。とて、お許がない。せめて御修理を願ひ出て、漸くお許を得た。しかし、適當な皮がないことを言上いたしましたところ、何の皮でも宜しいとの思召であつたので、赤犬の皮で補足したと申すことで、侍従が「この邊が犬の皮です」と説明して居られました。

その傍に、<sup>(一)</sup>ホワイトシャツを入れる白い<sup>(二)</sup>ボール箱やうなものが、澤山積重ねてございましたから、何にあそばすものか。と侍従に尋ねましたところ、やはりシャツの空箱である

〔White-shirt〕  
〔Board〕



上奏  
裁可  
主務者

隨時

詠草

御歌所

用ひるにそ  
の途を以て  
す

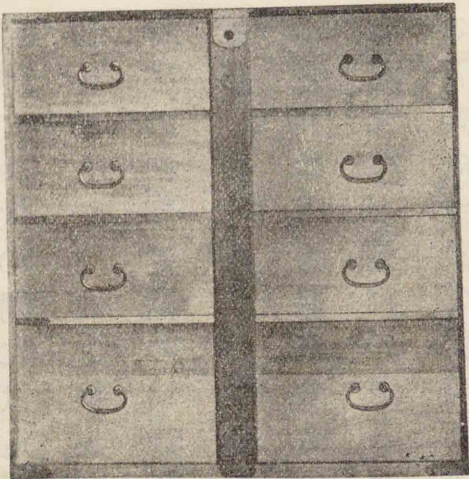
反故

が書類を入れるに便利であるとして、御手許に留め置かせられたのであるとのございました。

大臣方より上奏御裁可を願ふ書類は、紙袋に入れ、表に主務者の名を署して奉るのださうですが、御親裁の後は、別の紙袋に入れてお下げになる。そして御不用になつた前の紙袋は、一枚たりともお棄てあそばされず、隨時御詠出の御製をお認めになる御詠草にお用ひになりました。それをお側の方が別紙に拜寫して、御歌所にお廻し申したのでございます。實に天下のものはい用ひるにその途を以てすれば、一として無用なものはない。先帝はかく萬機の政を聞き召されながら、一枚の反故をも棄てさせられず、廢物を御利用あそ

冗費

君一天萬乗の



もみ製御筆筒

ばされたのでございました。

また傳へ承るに、先帝が皇室費豫算を御親裁あそばされる節は、詳細に御覽になり、祖宗の祭祀や慈善に關する費目の外は、力めて御節約相成り、聊かにも冗費をお省きあそばされたと申すこととございます。一天萬乗の大君におはしましなから、禿びた御筆をお用ひになり、破れた敷皮をお下げにならぬといふのは、いかなる思召でいらせられませうか。皆これ、節すべきを節して、有用



獎勵

趣を異にす

な事にのみお用ひあそばさうといふ大御心に外ならぬことと存じます。

さてお次の間には、造花や、彫刻や、種々な物品が備へてございました。これを拜見いたしまするに、學校や展覽會等に行幸の節、御獎勵の爲お持歸りになり、またはお買上にならせられたもので、御裝飾の御目的とは考へられませんか。それ故、造花なども格別なものでなく、何年前のものか色もさめはてて、殆ど裝飾の用をなさぬものまで、そのまゝになつてございます。その他、美術工藝品のお買上も、皆御獎勵の爲で、俗人の道樂とは全く趣を異にしていらせられます。御製に、

千よろづの民と偕にも樂しむに

リユクリチ

御心づくし  
隆々として  
興る

ます樂みはあらじとぞ思ふ  
とございますが、實にこのやうなお樂みを求めさせられんが爲、先帝には長い年月の間、大いなる御苦心をあそばされたのでございます。

今や我が國運は、先帝の長き御心づくしのお蔭を以て、隆として興り、我等は世界の一等國民となりました。願れば我等は長い間、聖天子御一人に、非常な御苦勞をお掛け申し上げましたのでございます。ここに御遺物拜觀の光榮を拜謝するに當り、更に

國のためいよいよ勵め千よろづの  
たみもこゝろをひとつにはして



服膺す

の御製をも同時に服膺して、舉國一致、力のあらん限りをつくし、以て御高恩の萬分の一に對へ奉らんことを誓ふ次第でございます。

— 巖手縣學事彙報 —

三 明治神宮に詣でて

御紋章打つた大鳥居を潜つて、砂利白い參道を進んで行く。道を挟む神木は全国各地からの獻上で、樹々の深い緑の色にも、國民が崇敬の心はへは認められる。樓門を入つて神前に額づけば、そゝろに明治の大御世が心のうちに浮かんでくる。

鳳輦

そゝろに

鳳輦しづしづと京都の御所をお立ちになり、東海道を江

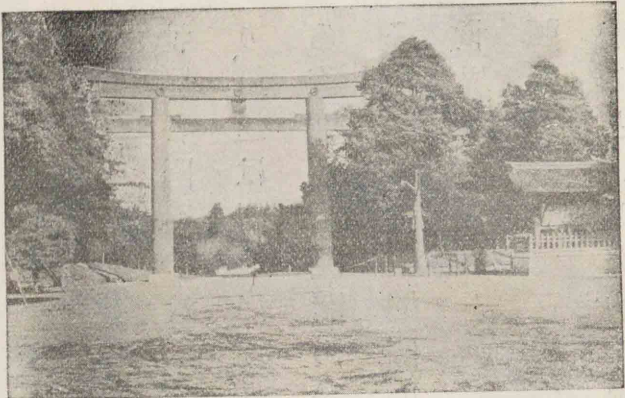
(一)明治元年九月二十日京都御發輦、十月十三日江戸御着輦

首都

稜威

齒牙に掛く

振興す



戸へお下りになつたのは、明治元年の秋であつた。やがて江

居 大 鳥 居  
戸を東京と改稱して、ここに大日本帝國の首都は定まつたのである。それからの四十餘年の大御世、御稜威の光は日一日と我が國の面目を改め、地位を高めて行つた。さきには列強から齒牙にも掛けられなかつた帝國が、後には世界の一等國と認められるやうになつたのは、實にこの天皇の御治績ではないか。明治五年には學制を發布して普通教育を振興せしめ給ひ、六年には



徴兵

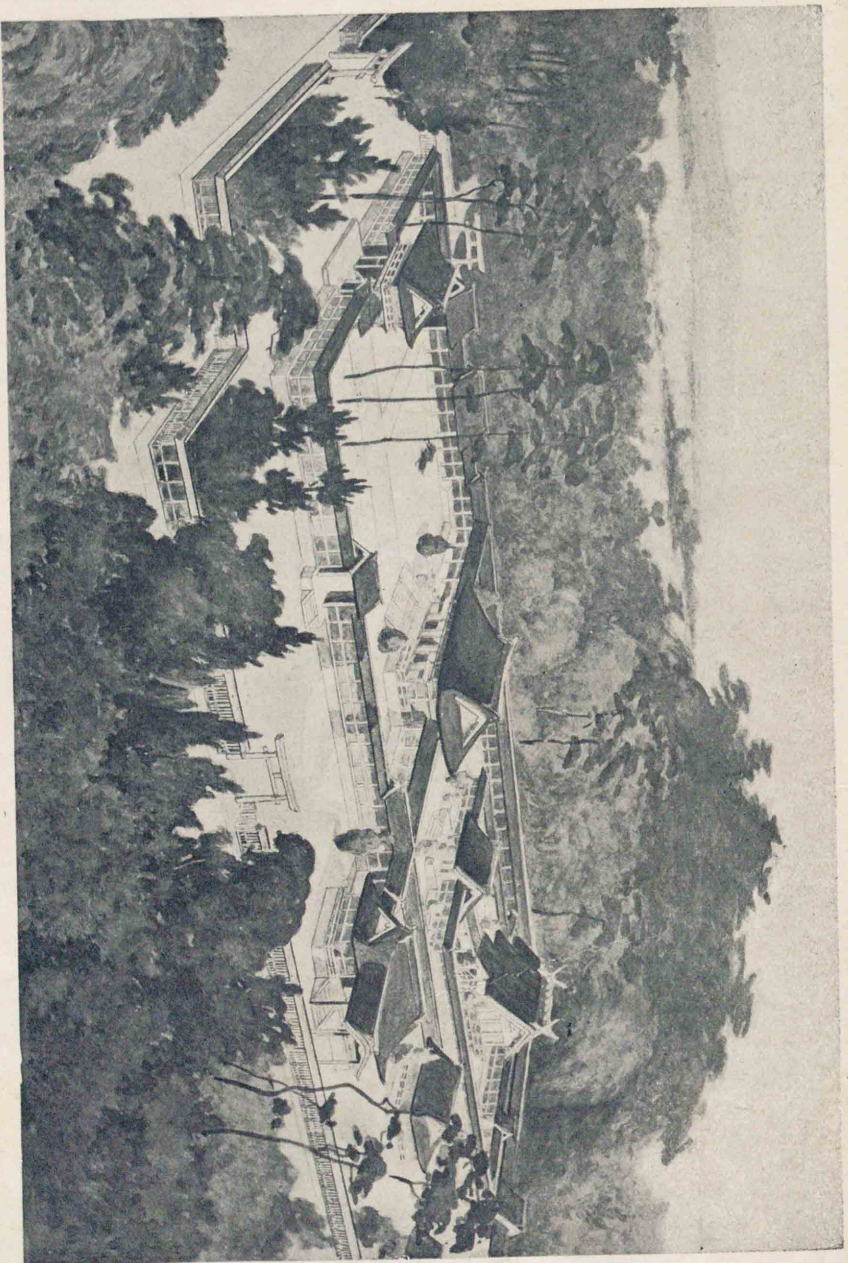
(Mile)

膨脹

趣旨  
陋習  
長を採り短  
を補ふ

徴兵の制を定め給うたので、家に不學の子なく、全國皆兵といふ今日の有様になつたのである。數隻の小汽船があつたばかり、一哩(一)の鐵道もなかつた日本は、明治の御治世に於て、世界各國への航路を通ずる大汽船會社を有することとなり、鐵道は内地だけでも一萬二千五百哩以上になつた。かゝる交通運輸機關の發達は、即ち産業の増進、貿易の膨脹を語るもので、通信機關の進歩もまた著しい。これは廣く知識を世界に求めるといふ趣旨から、西洋の學術を輸入し、舊來の陋習を破つて百般の事業を改善し、他の長を採り、我が短を補ふといふ努力が、絶えず行はれた結果である。

かくて明治二十二年には帝國憲法の發布があり、翌二十



皇 軍 學 堂



立憲君主國

(一)明治二十三年十月三十日明治天皇が教育に關して勅諭になつた勅語

國教の大本

香壇の差

三年には帝國議會の開會があつて、我が國は東洋唯一の立

憲君主國となつた。(一)教育勅語を以て

國教の大本をお示しになつたのも

この年であつた。明治二十七八年、同

三十七八年兩度の戰役で、世界各國

は確實に我が國民の教育、文化の程

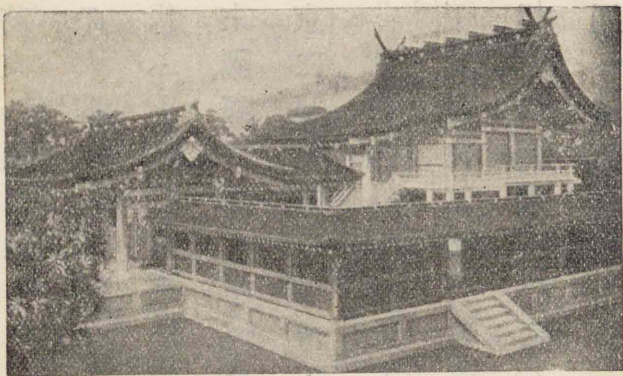
度を知り得たので、我が國に對する

尊敬は、次第に加つたのである。明治

の初年と末年との比較は、眞に香壇

の差といふものであらう。外國人が

これを世界史上の不思議といつたのも無理はない。



中門及び御本殿



典(儀式)  
典(重本書)  
物  
(例)大字典

追想  
回顧

大典

もつたをい  
いぬりをたつて  
八閉の心  
目極まる  
重本(重本)

前(こ)しと  
ひりかて  
かかると

照鑒

(一)奈良縣高市郡  
白檀村字畝傍  
にあつて神  
武天皇と媛蹈  
輔五十鈴姫皇  
后とを祀る。  
(二)京都岡崎町に  
あつて桓武天  
皇を祀る。明  
治二十八年平  
安奠都一千年  
記念として建  
てられたもの。  
(三)東京市赤坂區

帝國憲法は千古不磨の大典、教育勅語も萬世不易の經典、  
將來の國民はこれを讀む毎に、明治天皇を追想し奉り、明治  
の大御世を回顧するであらう。さうして帝國の首都東京を  
想ふと共に、東京に明治神宮のあることを思ふであらう。將  
來國家にたとひ何事があつても、明治天皇の御靈が常に東  
京に照鑒あつて、帝國を護らせ給ふことを考へれば、そこに  
非常な強みを覺え、安心を感じるのであらう。檀原神宮に參り  
平安神宮に詣でる時よりも、更に大きい、強い、別種な感想を  
起すに相違ない。こんなことを考へながら、本の參道を青山  
通へ出た。

三三 親の愛の歌

小林 一郎

一

大空の日の光、

光の中に物皆榮ゆ。

嗚呼、貴しや我が父。

父の力を日と仰がん。

二

果もなき地の惠、

惠によりて物皆育す。

嗚呼、貴しや我が母。

母の情を地と頼まん。

三

父の愛厚ければ



鬼神

鬼神も共にこの身を護る。

嗚呼、頼みある人の世、

希望に充てる我が行末。

四

母の愛深ければ

世の波風も身を損はず。

嗚呼、頼みある我が家、

永く榮えん國と共に。

五

國のため世のため

力つくせと教へ給ひし

我が父母の御こゝろ。

嗚呼、これぞ我が家の寶。

六

父のため母のため

心つくせと教へ給ひし

我が大君の御ことば。

嗚呼、これぞ我が國の寶。

御先祖様の御墓〔自修文〕

正宗白鳥

おばあさんは御墓参が好きであつた。太郎や二郎はおばあさんに連れられてよくお参をした。これがおぢいさんの御墓。これがおぢさんの御墓。これがひいおばあさんの御墓。といふやうに、太郎は一つ一つ墓の名をよく覚えてゐた。一本、二本、三本と數へて見ると、みんなで十五本も石碑が立つてゐた。背の高いのもあるし、低いのもあるし、苔が生えて汚いのもあるし、手で觸つてもつるつるした

小説家。名は忠夫。早稲田大學出身。岡山縣の人。



(一)春分の日を中日として、その前後各三日を合はせて七日間。  
幽霊花 まんじゆしやげのこと。彼岸花ともいふ。

綺麗な新しいのもあつた。  
櫛しきやいろいろな草花を供へたり、線香を立てたり、水を注いだりするのが、太郎にも二郎にもおもしろかつた。墓場は御寺のうしろの高い所にあつて、海が見えて、眺が美しかつた。春の彼岸の時分には、墓場のうしろの山に桃や杏の花が咲いた。秋の彼岸の時分には、眞赤な幽霊花が墓場の縁に咲いた。いつ來ても小鳥があつちこつちに啼いてゐた。

「こんな景色のいい、御先祖から代々そろつてゐる御墓場に埋められ、ば安心だ」と、おばあさんはいつてゐた。

おばあさんに連れられないで、自分たちだけで御墓の方へ行くことはめつたになかつた。それでも近所の友だちについて、蟬を捕りに、頬ほ白しろを捕りに御寺や山の方へ行つた時に、自分の家の墓場を通ることはあつた。おばあさんと一緒に、お参をして、花や水を供へて御辭儀をする時には、自分の御先祖様の墓だといふので、何かし

命日  
その人の死んだ日に當る日。忌日ともいふ。

Match.  
(燭十)

ら懐かしかつたり、有難かつたりした。

太郎が十で二郎が八つになつた年の秋、おばあさんは病氣で長い間寢床から起きられなかつた。或日、けふはをびさんの命日めいじちだけれど、お参ができない。とおばあさんが氣に掛けていつたので、太郎が「それぢや僕が参つて來ようか」といふと、おばあさんは喜んだ。

「太郎は御墓参が好きだ」と、おばあさんは笑つた。

「僕は好きぢやないけれど、参つてあげるのだ。」  
太郎はおかあさんから線香とマツチ(一)とをもらつた。二郎もついで行くことになつた。家の庭には花がないから、御寺へ寄つて櫛しきでももらつて供へるがいい。水を上げたければ、御寺で桶を借りてお出で。」とおばあさんは寢床の中から指圖した。

兄弟は急いで歩いた。よく晴れた温かい日であつたから、坂道を登つてゐるうちに、二人ともびつしより汗をかいた。山の方から樹を切る音が聞えて來たが、人間の顔はどこにも見えなかつた。太郎



はせいせい息をつきながら、線香に火を點けて、をぢさんの墓へ供へて、御辭儀をした。二郎も眞似をして御辭儀をした。

「おばあさんはいつも口の中でぶつぶついつて拜んでゐる。死んだ人に聞えるのか知らん。」と太郎がいつた。

「をぢさんはこの土の下へ入つてゐるの。」と二郎は尋ねた。

二郎は線香の煙が風のない空に漂つてゐるのを、おもしろさうに見てゐた。太郎は考へながら、

「おばあさんは死ぬかも知れない。さうしたらここへまた一本御墓ができるんだな。十六本目の御墓だ。」

「おばあさんは寝てばかりゐるから死ぬんだな。幾日したら死ぬの。」

「そんなことがわかるものか。けふ家へ歸つたら死んでゐるかも知れない。」

「死んだらどうなるんだらう。僕一度死んで見たいな。おばあさん

のやうに寝てばかりゐたら、死ぬるのだらうか。」

「をぢさんにでも尋ねて見る。」

「だつて、いつお参に來ても、御墓の中にある人はものをいはずやないか。おばあさんは獨りで何かいつてゐるけれど、どの御墓も返事をしないや。」

二郎のいふ通りだと、太郎も思つてゐた。だけど、おばあさんは死んでも、外の御墓の人とは違つて、自分たちがお参をしたら、ものをいふかも知れないと思つてゐた。そして死んだ人がものをいふのを、一度聞いて見たいと思つた。

落葉は墓のまはりに積つてゐた。兄弟は落葉を堆くかき集めて、マッチを擦つて火を點けた。葉がよく枯れてゐたので、火は勢よく燃上つた。そこに散つてゐた木片や、竹の筒に差されたまゝ朽ちてゐた櫛なども、おもしろがつて火の中へはふりこんだが、はちはちと音を立てたり、しゅつしゅつと音を立てたりして、どれもみ



んな燃えてしまつた。火の氣が衰へたあとには、同じやうな薄黒い灰ばかりが残つた。太郎は棒の先で灰の中を搔廻したが、すると、蟬の形をした小さい蟲が見つかった。をかしな蟲だなあ。何といふ蟲だらう。といつて手でつかむと、その蟲は潰れて、落葉や櫛の葉と同じやうに、黒い灰になつてしまつた。

さつきから切られてゐた木のどしんと倒れる音が、うしろの山の方から聞えて來た。兄弟はびつくりして振返つた。墓の上の梢に休んでゐた鳥も、音に驚いたのか、羽音をさせて飛んで行つた。

兄弟は家へ歸つて、おばあさんに御墓の話をした。おばあさんはちつとも變つたところがなかつた。火遊なんぞしちやいけません。山火事にでもなつたら大變ぢやありませんか。とおばあさんはいつた。

そしておばあさんは四五日すると、床から起きて、不斷と變らないやうになつた。容易に死にさうでなかつた。太郎はおばあさんが

(一) 正宗白鳥の隨筆集。大正十三年東京新潮社發行

風致

山容水態

題材

いつまでも生きてゐてくれることを喜んだが、おばあさんが墓の中から自分にものをいつてくれる時が、まだまだ容易に來ないのが待遠しいやうな氣もした。

(一) 泉のほとり

### 三三、鳥の美

飯 島 魁

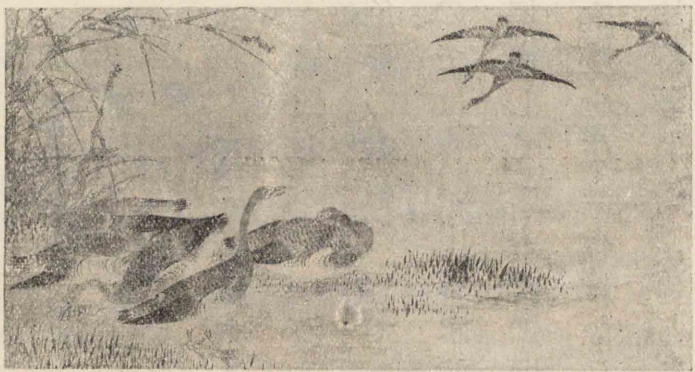
風致といふものは、單に山の形や、水の姿や、それに美しい色彩の美を興へてゐる植物などばかりで組成されてゐるのではない。山容水態がいかに麗しくても、綠樹彩花がいかに美しくても、その間に動く何物かがなければ、風景は生きた趣を生ぜぬ。昔から花鳥といふ。文學、繪畫、彫刻、音樂等あらゆる藝術には、花と鳥とが重要な題材とされてゐる。殊に我が國の繪畫や詩歌には、花と鳥とが主要な地位を占め、その



貧弱

(一)古今集の歌。  
よみ人しらず。

あしらふ



(筆信元野狩) 雁 蘆

中から花鳥を除き去つたなら、非常に貧弱なものとなつて

しまふ。

(一) わが宿の池の藤波咲き

にけり山ほとゝぎす

いつか來鳴かん

といふ通り、花だけ、鳥だけでは單調である。花に鳥をあしらひ、鳥に花を結びつけて、始めて複雑な美が成立する。梅に鶯、卯の花に杜鵑、蘆の花に雁といふ風に、四季それぞれの花には、鳥が附屬物となつてゐる。

獨り鳥ばかりでなく、あらゆる動物は皆かく風致に美を

加へてゐる。禽獸蟲魚は昔

小 からの畫材であり、詩材で

ある。春日野から鹿を奪ひ、

武藏野から蟲を除いたな

らば、その春の旦、秋の夕べ

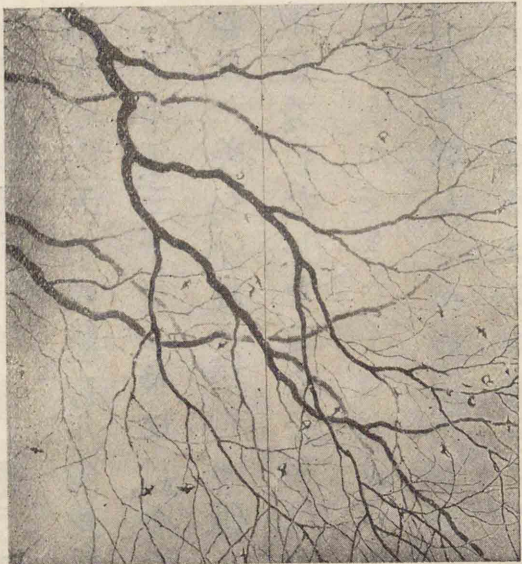
の景色は、どれだけ無味な

ものとなるであらう。それ

ほどに美觀上の價値ある

ものを、人間が勝手氣まゝに捕殺する權利をもつてゐるで

あらうか。わかり易くいへば、狩獵税を出しさへすれば、それ



(事一野佐) 鳥 小

(一)奈良春日山の  
麓。  
(二)武藏國の太平  
原。

美觀

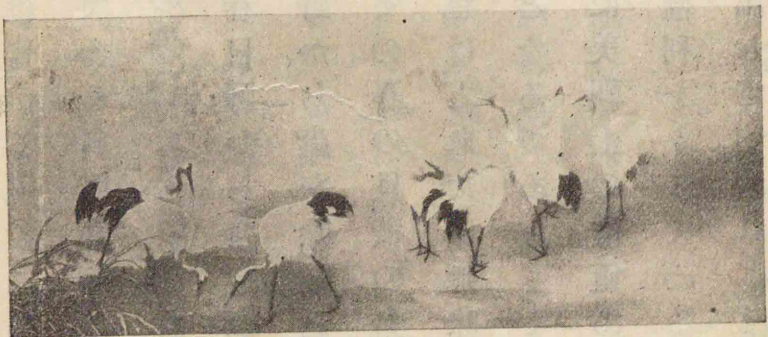
權利



で勝手に鳥獸を殺してもよいであらうか。わたしたちが擅に鳥獸の命を絶つその結果は、一年や二年では現れて來まいが、五年の後、十年の後は何れに二十年、三十年の後には、わたしたちの見た美しい鳥も、珍しい獸も皆姿を隠して、わたしたちの子孫はそれを見ることができなくなりはずまいか。鶯の笠に縫ふてふ梅の花」とある鶯は、どんな鳥であらうといふやうなことになるかも知れぬ。かうなればゆゝしい

(一)「鶯の笠に縫ふてふ梅の花、折りてかささん老かくるや」と。(古今、東三條左大臣)

ゆゝしい



一のそ (筆仙樵藤近) 鶴田葦

誇大な言

過去を以て將來を推す

一大問題である。わたしたちは、わたしたちの見た鳥や獸を、やはり子孫に遺して、子孫にも楽しませてやりたく思ふ。

これは誇大な言ではない。「日本の鳥類は今將に全滅せんとしつゝある。去年と今年とを比べて、その間の差異を發見することは困難である。しかし、今日と十年前、二十年前と比べて見れば、その間に非常な差異のあることを何人も感知するであらう。過去の變化を



二のそ (筆仙樵藤近) 鶴田葦



現象

歴史的にな

以て將來を推せば、十年後、二十年後にどういふ現象を呈するであらうか、今から豫め想像するに難くない。廣い世界の目から觀れば、滅亡した動物は無數である。狭い日本だけで觀察しても、すでに滅亡して歴史的になつたものが、いくらかもあるのである。

諸子は美しいとき色の色彩を知つてゐるであらう。しかし、今はとき色こそあれ、その色にこの名を負はせた朱鷺といふ鳥はゐない。とき色とは、その色が朱鷺の羽色に似てゐるから附けられた名であるが、この鳥は最早全滅しかつてゐて、容易にその姿を見ることができない。葦田鶴の千代呼ばふといはれた江戸の千代田城は勿論、江戸附近には多

(一)江戸城のこと。今の宮城。

(一)東京市京橋區築地三丁目に在る西本願寺。  
(二)東京市淺草區松高町に在る東本願寺。  
(三)天恩山羅漢寺もと本所線町五丁目、今他へ移つた。

思案投首



(筆雲耕田山) りとのふこ

く鶴がゐたものであるのに、維新後はその影をだに見ることができなくなつた。こふのとりも昔は澤山ゐた。淺草の觀音へ行く子供は、皆こふのとりが見られるといつて喜んだものである。<sup>(一)</sup>築地、<sup>(二)</sup>淺草の両本願寺、本所の五百羅漢の屋根の上には、うようよするほど澤山こふのとりがゐたが、今は早全國一般にゐなくなつた。鷺の滅つたことも夥しいもので、昔は到る所の水田に水鏡を映して、思案投首の白鷺を見るこ



とができたが、今日では御獵場以外これを見ることはできない。これはほんの二三の例である。その他あらゆる鳥類は、日本から姿を隠さうとしてゐるのである。誠に風致の上から觀て、ゆゑしい一大問題ではないか。

### 三四 月雪花

春はハナミ、夏はスミ、秋はツキミ、冬はユキミ、夏のまだけが、月雪花三つの眺に關係はないが、夏の月夜の涼はまた格別に快い。春の花見は昔の大宮人にも、今の丁稚小僧にも、一年間の最大歡樂である。芋、栗を捧げて秋の月を祭る風俗は、同じく一般國民的の雅興である。御月様いくつ。の俚歌、雪

雅興  
俚歌

風流

よふれふれ。の童謠、月雪花の風流は子供の時から教へられて、我等の頭にしみこんで居るのである。

徑庭  
詩的教育

月雪花を見て感ずるのは、歴史的懷舊の念が添ふからである。我が國の櫻花は、唐人も高麗人も美しいといふに違ひないが、彼等の感ずるところと、我が國民の感ずるところとは、大きな徑庭がある。西洋人は觀月といふことに關しては、殆ど何の興味をももつて居らぬ。我等は子供の時から月雪花で教育された。月雪花を弄ぶといふ詩的教育を受けて來たのである。

塵世  
隱遁者

風流の眞義は塵世を忘れることである。全く塵世を忘れて活動社會を離れることは隱遁者の所行であるが、少くと



皎々  
皚々  
利慾に營々  
たり

人格

蹉跌



一のそ (筆水刀堀西) (言納中町櫻) 見 花

も皎々たる明月、皚々たる白雪、雲の如く霞の如き花に對して、これを眺めて居る間は、いかなる人も利慾に營々たる實社會を忘れるのである。月雪花の効用は美術と同じく、人を高尚にし、人を温雅にするのである。

我等日本人は月雪花を大いに觀賞して、これを人事と結合した。高尚な人格はこれを月雪花に譬へる。月に叢雲、花に風、月の入るのや、雪の消えるのや、花の散るのは、これを人の蹉跌や死去

吟詠  
喩譬

有情化  
有德化

光風霽月  
君子人

邪佞の徒  
なぞらふ



二のそ (筆水刀堀西) (言納中町櫻) 見 花

に譬へる。さうして繁榮、隆昌、幸福は月雪花の美に比較した。古來の吟詠はすべてこの喩譬法を用ひて居る。

我等は月雪花を尊敬し、月雪花に種種な美德を附加する。無情な物を有情化した上、更にこれを有德化する。のである。月は公平無私、寸毫も汚のないものとして、光風霽月などと熟語されて、君子人の赤心に比べられる。月を蔽ふ雲はその光明を掩ふものとして、小人邪佞の徒になぞらへられる。また雪は



水潔  
嚴肅

水潔一點の塵のないことから、冷たい嚴肅なところを見て、潔白な精神や節操の動かないことを聯想する。花は爛漫たる美しさの、忽ち風に散行くのを惜しんで、節義の士が身命を擲つのに譬へる。月や、雪や、花やに靈があつて、これ等の徳を備へて居るやうに感ずるのである。古人がかく感じ來つたそのまゝを我等は承繼（一）いで、我等もさう感ずるのである。月雪花を觀賞し得る我等は幸福である。盲人の學者保己一の逸事として傳はつて居る話に、或時月に對して、

花ならば探りても見んけふの月

といつた。また京都に上つた時、御所の南殿（二）の櫻の花盛と聞いて、

（一） 堵氏。通稱辰學之輔。盲人國人之編者。武藏の四年。癸二。文政八年。十六。逸事

（二） 紫宸殿のこと。

民族  
傳説  
品性  
髣髴

目に見ねばせめてなでんの櫻かなと戯れた。東海道で富士の山下を過ぎる時には、

言の葉の及ばぬ身には目に見ぬも

なかなかよしや雪のふじのね

といつた。

月雪花の眺を恣にすることのできない民族は不幸である。月雪花があつても、これに附加された傳説を有しない民族もまた人生の興味に乏しい。我等は月雪花に對して、古來の文學を味はひ、國家を憶ひ、品性を養ひ、國民性を知ることができる。月雪花を通じて、我が國民の歴史は髣髴（一）として眼前に浮かぶのである。保己一は肉眼を以ての月雪花は見な



心眼

かつたが、心眼を以ての月雪花は眺め得たのである。

改訂帝國新讀本卷一終

大正十三年十一月廿六日發行  
大正十四年四月廿二日再發行  
昭和二年十二月廿四日再發行  
昭和三年五月十五日再發行

(本讀新國帝訂改)

價 定	
自卷一	至卷四
各金四拾六錢	各金四拾壹錢
自卷五	至卷八
各金四拾壹錢	各金參拾四錢
自卷九	至卷十九
各金四拾壹錢	各金參拾四錢

昭 和 三 年 度 定 價	
自卷一	至卷四
各金七拾六錢	各金六拾八錢
自卷五	至卷八
各金六拾八錢	各金五拾七錢
自卷九	至卷十九
各金五拾七錢	各金五拾七錢



編者 芳賀 矢一

東京市神田區通神保町九番地  
富山房

印刷者兼 合資會社 富山房社長  
坂本 嘉治 馬

代表者 東京市小石川區音羽町六丁目  
富山房印刷工場

發行所

東京市神田區通神保町九番地

合資會社 富山房

電話九段一九二二・一九三三・一九三番  
振替口座東京五〇一番









第十四卷 第一号  
土井政行

